機能性食品素材を用いた睡眠の質に及ぼす影響

Effects of functional food ingredients on sleep quality

北嶋 優衣
Yui Kitajima

大妻女子大学大学院 人間文化研究科人間生活科学専攻 健康・栄養科学専修

キーワード：眠気，機能性食品素材，臨床研究
Key words：Sleepiness, Food ingredients, Clinical research

１．目的

日中の過度な眠気とは，日中における制御不能な居眠りや眠気を指し，普段の生活において注意力や集中力の低下，倦怠感を引き起こし，ヒューマンエラーを誘発する可能性[1)]が示唆されている．さらに，学業成績への悪影響[2)]，メンタルヘルスの悪化[3)]など，生活の質に重大な影響を及ぼすことが報告されており，現代社会における重要な健康課題の一つして注視されている．近年では，国民の健康意識の向上に伴い，眠気や睡眠に関する研究が活発に行われている反面，令和 6 年度版厚生労働白書[4)]によると，日本人の平均睡眠時間は約 7 時間と世界的に見ても最短水準にあり，この傾向は幅広い年齢層に共通して見られる．睡眠の質・量の低下は，日中の眠気を引き起こし，糖尿病，高血圧，メタボリックシンドロームなどの生活習慣病やうつ病の発症リスクを高めることから，早期に発見し解決する必要がある．しかし，これまでに，医学生や看護学生を対象とした眠気や睡眠問題に関する研究報告[3)]は多く見受けられる一方，栄養学生を対象とした研究は少ない．また，眠気を誘発している要因や睡眠習慣および食生活との関連性については十分な検討がなされていない．くわえて，これらの問題に対する包括的な理解と効果的な介入手法の確立は依然として課題となっている．

そこで本研究では，Study1 では女子大生を対象にした，日中の眠気に影響を及ぼす睡眠習慣と食生活との関連性について検討を行った後，Study2 ではその実態や問題を改善する機能をもつ機能性食品素材であるブルーベリー葉を用いたヒト介入試験を行い，その摂取が睡眠の質の改善を通じて日中の眠気軽減に及ぼす効果を客観的および主観的指標を用いて評価し，日中の眠気対策としての新たなアプローチの確立を目指す．

２．方法

<u>Study1：栄養学生の日中の眠気に影響を及ぼす睡眠習慣と食生活との関連性</u>

18 歳から 21 歳までの栄養学生を対象に，日本語版エプワース眠気尺度（JESS），ピッツバーグ睡眠質問表日本語版（PSQI-J）および食物摂取頻度調査票（FFQ NEXT）を用いたアンケートを実施した．JESS は日中の主観的な眠気を測定する自己記入式の尺度であり，カットオフポイントは 11 点である．統計解析には IBM SPSS Statistics を使用し，$P<0.05$ を統計的有意水準とした．

<u>Study2：ヒト介入試験（ランダム化二重盲検プラセボ対照並行群間試験）</u>

本試験は倫理審査委員会承認後，18 歳以上 70 歳未満の健常成人男女から募集し，性別，年齢，ピッツバーク睡眠調査票得点で層別ランダム化して，群分けを行った．被験者は，ブルーベリー葉茶（Active 群），プラセボ茶（Placebo 群）のどちらか一方を 1 日 3 回，3 週間摂取し，アクチグラフによる睡眠解析パラメーターおよび OSA 睡眠調査票 MA 版（OSA-MA）を用いた起床時の睡眠内省を評価した．統計解析には IBM SPSS Statistics を使用し，$P<0.05$ を統計的有意水準とした．

３．結果と考察

Study1：栄養学生の日中の眠気に影響を及ぼす睡眠習慣と食生活との関連性

JESS の結果では，11 点以上が 62.1%と全体の約 6 割が眠気に異常をきたしていた．そこで，眠気を従属変数とし，PSQI-J の睡眠の質，入眠時間，睡眠時間，睡眠効率，睡眠困難，日中覚醒困難の 6 項目を独立変数としたロジスティック回帰分析を行った結果，入眠時間と日中覚醒困難に有意な関連性が認められ，眠気に影響を及ぼしていることが示唆された．一方，入眠時間を従属変数とし，FFQ NEXT による食品群別摂取量を独立変数としたロジスティック回帰分析の結果，海藻類の摂取量のみにおいて有意な差が認められ，さらに，海藻類の摂取量は眠気とも有意な関連性を示した．

Study2：ヒト介入試験（ランダム化二重盲検プラセボ対照並行群間試験）

Sadeh のアルゴリズムによる睡眠解析の結果，睡眠効率の経時変化において両群間に有意な差が認められ，摂取 3 週目で Placebo 群と比し，Active 群で有意に高値を示した．また，中途覚醒時間においても両群間で有意な差が認められ，摂取 2 週目から Placebo 群と比し，Active 群で有意に低値を示した．一方，OSA-MA においても因子 2(入眠と睡眠維持)で両群間に有意な差が認められ，摂取 1 週目の Active 群において，睡眠効率と有意な正の相関関係が認められた．

４．まとめと今後の課題

本研究により，栄養学生における日中の過度な眠気が深刻な問題であることが明確に示された．特に，入眠困難が主要な要因として同定され，この問題が学生に限らず，入眠困難を抱える幅広い年齢層にも潜在的に影響を及ぼしている可能性が明らかとなった．食事要因の分析からは，海藻類の摂取と眠気との関連性が認められ，さらにブルーベリー葉茶の継続摂取が睡眠の質向上を通じて，日中の眠気軽減に効果的である可能性が実証された．これらの知見は，単一の食品摂取によるアプローチではなく，日常的な食習慣の包括的な改善と，科学的根拠に基づいた機能性食品素材の導入の重要性を示唆している．このような総合的なアプローチにより，睡眠の質を根本的に改善し，日中の過度な眠気を軽減することで，生活の質的向上が期待できる．

主要参考文献

[1]小西円，西山里枝，木原知穂ほか．看護系大学 1 年生の睡眠や眠気の経時的変化と特徴．日本看護科学会誌 2023；43：372–378.
[2]El Hangouche AJ，Jniene A，Aboudrar S. Relationship between poor quality sleep, excessive daytime sleepiness and low academic performance in medical students．Adv Med Educ Pract 2018；9：631–638.
[3]松田春華，小川智子，塚田理奈ほか．女子大学生における睡眠の質に影響する要因の検討．日本看護研究学会雑誌 2012；35：4.
[4]厚生労働省 令和 6 年度版厚生労働白書．図表 1-1-23 睡眠時間の国際比較．東京 2024.

おおむね自立した生活を送る高齢者の主観的健康感と栄養教育

Subjective Health Perception and Nutrition Education in Older Adults Living Independently

佐々木 春花
Haruka Sasaki

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 健康・栄養科学専修

キーワード：主観的健康感，介護予防，栄養教育
Key words：subjective sense of health, preventive care, nutrition education

１．目的

我が国の高齢者人口は急速に増加し，高齢者の介護予防の重要性が高まっている．要介護状態への進行を未然に防ぐことは，個人の QOL(生活の質)を維持するだけでなく，社会的にも介護費用の抑制につながる[1)]．先行研究では，要支援認定を受ける前段階の者や，要介護度が高い者に対し栄養教育を行うことで，介護予防や要介護度の悪化の抑制に寄与したことが報告されている[2) 3) 4)]．一方，おおむね自立した日常生活を営んでいる要支援・軽度要介護状態の者に対する栄養教育の効果に関する報告は乏しい．また，主観的健康感は，個人が自らの健康状態をどのように評価しているかを示す指標であり，主観的健康感が良好な高齢者は 5 年後の要介護度の悪化を抑制することが報告されている[5)]．従って，主観的健康感の評価は，高齢者の健康管理において重要となっている．

そこで，要支援・軽度要介護状態であるものの，おおむね自立した日常生活を営んでいる高齢者を対象に栄養教育を実施し，収集した言語データを質的に分析し，主観的健康感に影響する要因を探索する．これにより，高齢者の介護予防を推進するための栄養教育プログラム開発の一助とする．

２．方法

千葉県松戸市の機能訓練型デイサービス「デイサービスまばし」において，要支援 1～要介護 2 に認定されている施設利用者 7 名を対象に栄養教育を実施した．

事前インタビューで，対象者の日常の食事内容を詳細に聞き取り，生活状況や介護予防サービスの利用状況，家族や地域からの支援状況を確認し，健康や食事に関する不安や注意点，今後の生活や健康への希望について聞き取った．また，対象者からインタビュー時の体重，直近の血液検査結果の提供を受け，デイサービス施設からは介護保険サービス利用票，通所介護計画，個別機能訓練計画書，昨年度からの体重変化に関する情報提供を受け，対象者の健康状態を把握した．これらの情報を基に，対象者の状況や希望を総合的に把握しながら，介護予防を目的とした栄養教育を 3 か月間(月に 1 回，計 3 回)実施した．

主観的健康感を含む QOL 指標の評価として SF-36 を用い，8 つの健康領域の評価を行った．また，高齢者の体重減少に関わる食欲の簡便な測定方法である CNAQ-J を用いて食欲を評価し，食品摂取の多様性スコア（DVS）を利用して，日常の食事における肉，魚，卵，牛乳・乳製品，大豆製品，緑黄色野菜，果物，いも類，油類，海藻類の 10 食品群の摂取頻度を把握した．事前インタビュー時および栄養教育終了 1 か月後に，SF-36，CNAQ-J，DVS スコア，体重を確認した．

栄養教育期間中に，対象者から収集した質的データを分析するために，比較的小規模な質的データの分析に有用な SCAT（Steps for Coding and Theorization）の手法を採用した．各対象者について，初回インタビュー，3 ヶ月間の栄養教育期間中の記録，最終評価時のインタビューの 3 つのタイミングで逐語録を作成し，これらのデータを基に SCAT の手順に沿ってコーディングおよびカテゴリー化を行った．その後，ストーリーラインの作成と理論的記述の構築を行った．

本研究は，大妻女子大学生命科学研究審査委員

会において承認を受けて行った．（受付番号:05-048）また，大妻女子大学人間生活文化研究所から令和 6 年度の大学院生研究助成（B）を受けた．（課題番号:DB2417）

３．結果と考察

今回の対象者の平均年齢は 81.7 歳で，男性 1 名，女性 6 名であった．要支援・要介護認定度については，要支援 1 が 3 名，要支援 2 が 1 名，要介護 2 が 3 名であった．居住形態については，独居が 5 名，家族と同居が 2 名であった．

本研究では，7 つの症例を通じて対象者の主観的健康感を支える要因を検討した．その結果，社会的つながり・食事の多様性・自己効力感・他者志向の 4 つの要因が，生活の質や健康行動の持続に関連していることが明らかとなり，主観的健康感に影響を与えることが示唆された．

社会的つながりは，デイサービスの利用や友人との交流が孤独感を軽減し，心理的充足感を高める要因となることが確認された．一方で，家族と物理的距離がある場合，社会的孤立が主観的健康感の低下を引き起こすリスクとなることが示唆された．

食事の多様性は，食事への楽しみを増し，主観的健康感の向上に寄与することが示された．栄養教育を通じた調理法の提案が食の楽しさを促進する一方，市販食品の単調な味付けが食欲低下の要因となる可能性が示唆された．

自己効力感は，加齢に伴う身体的負担の増加による食事準備の困難さに影響されるが，簡便な調理法や作り置きの活用により維持されることが示された．自ら買い物を行い，食事のコントロールを維持することも自己効力感を支える要因と考えられた．

他者志向の意識は，健康行動の動機づけに寄与することが確認された．「家族に迷惑をかけたくない」という意識が生活の目的意識を生み出し，行動の維持につながっていた．

これら 4 つの要因を支えることが高齢者の生活の質の向上および介護予防につながると考えられる．そのため，医療・介護・生活支援が連携し，ケアマネジャーや介護職員，家族を含めた包括的な支援体制の整備が必要である．

４．まとめと今後の課題

本研究では，高齢者の主観的健康感に影響を与える 4 つの要因（社会的つながりの促進，食事の多様性の確保，他者志向の視点の活用，自己効力感の強化）が，介護予防において重要な役割を果たすことが示唆された．

高齢者の健康維持には，栄養のみでなく社会的・心理的要因が関与することが知られているが，本研究でもこれらの要因が主観的健康感を支える役割を持つことが確認された．また，一律の栄養教育では十分な効果が得られず，生活環境や価値観に応じた個別対応の重要性が再認識された．

管理栄養士は，食事内容や栄養状態の改善に加え，対象者の生活目標を考慮しながら QOL の向上を包括的に支援することが求められる．そのためには地域包括ケアシステムの構築が不可欠であり，多職種が連携することで高齢者が健康を維持しながら充実した生活を送る仕組みを整えることが重要である．

本研究では，7 名の症例を対象に主観的健康感を支える要因を検討したが，対象者数が少なく結果の一般化には限界がある．また，質的データを主とした分析のため，バイアスの影響を受ける可能性があり，今後は定量的データを併用した客観的な分析が求められる．栄養教育効果の持続性や，経済的要因・身体的健康状態などの影響についても十分に検討できていない．今後の課題として，多様な対象者を含めた研究の実施，定量的データの併用，長期的な観察，包括的な要因の分析が挙げられる．これらの課題を克服することで，より実用的で汎用性の高い栄養教育のあり方を明らかにしていくことができると考える．

主要参考文献

[1] 厚生労働省：介護予防マニュアル(改訂版:平成 24 年 3 月)，序章 介護予防マニュアルについて https://www.mhlw.go.jp/topics/2009/05/dl/tp0501-1_1.pdf
[2] 千田茉登佳：地域在住高齢者に対する介護予防事業における栄養改善プログラムの評価
[3] 矢島恵美子：高齢者介護施設で地域住民を対象に行う栄養教室とその評価―行動変容と関係づくりの効果―
[4] 深作貴子：特定高齢者に対する運動及び栄養指導の包括的支援による介護予防効果の検証
[5] 和泉京子：軽度要介護認定高齢者の 5 年後の要介護度の推移とその要因

妊娠・産後の母体と育児の食教育の実態と今後の母親学級の展開について

The Actual Situation of Food Education for Pregnant and Postpartum Mothers and Child Care and the Future Development of Mothers' Classes

鹿野 紀美代
Kimiyo Shikano

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 健康・栄養科学専修

キーワード：生活，母親学級，栄養教育
Key words：Life, Parents' Classes , nutrition education

1. 目的

若い女性における高頻度の低体重者(やせ)は,我が国の健康にかかわる社会問題として指摘されている [1].妊娠期ステージ別妊婦の食生活はエネルギー量・栄養素ともに推奨量・目安量を摂取できておらず,非妊娠時に必要なエネルギー量に満たない妊婦も多い [2].食意識や知識があるとしても食生活の改善に至らないことも報告されている [3].また,男女共に妊娠を契機に不安を持つ者が多く [4],妊婦の健康管理に課題が多い.

こうした現状で母親学級等の開催は『成育医療等基本方針』において対策が整備され,妊産婦に対して必要な成育医療等を切れ目なく提供する総合的な施策の推進が求められている.母親学級は,妊娠中の母体と胎児,出産における健全で望ましい経過をたどり健康な出産と乳幼児の発育のために,妊娠中の母体と胎児の栄養管理,食事方法についての栄養教育として重要な位置づけにある [5] [6].しかし,コロナ禍経験後の母親学級は,妊産婦やパートナーに妊娠中の健康に影響を及ぼす,この時期に必要な食生活や食行動の教育時間が確保されていないなど栄養教育の開催状況に問題が生じている [7] [2].コロナ禍経験後の新たな開催方法には,就労状況の時間の制約の実態に適応できない,あるいは実施側の計画する教育内容や開催方法が参加者の要望に添わないなど多くの課題がある.そのため,受講を必要と考える妊婦とパートナーの母親学級への参加を困難にしている状況がある.母親学級に参加する妊婦やパートナーを取り巻く環境は,充実しているとはいえない状況にある [8].実施者側の開催状況や教育内容などの状況と受講者側の現状,教育体制や内容に関する要望を明らかにする.踏まえて,必要と考える食生活改善の取り組みに有効な妊婦の栄養教育を重視した母親学級の開催を検討する.新たな母親学級における栄養教育の構築を行うことを目的に研究を行う.

2. 方法

1.母親学級実施状況に関する開催施設のアンケート調査

都内 23 区保健所・保健センター（保健所） 93 施設,分娩取り扱い施設（病産院）107 施設を対象にアンケート調査を実施した.アンケート用紙は郵送で依頼し,返送又は Google フォーム入力で回収し,施設間を比較検討した.

2.母親学級参加者による研修の実態調査と開催内容の要望に関するアンケート調査

都内 M 病院において,1 歳以下の乳幼児または受診のために来院した 1 歳以下の乳幼児をもつ母親に,産婦の妊娠経過中の心身状況と母親学級の受講状況と要望について Google フォームでのアンケート調査を実施した.

3.アンケート調査結果を分析し,母親学級の企画と開催を行い,母親学級の栄養教育について検討した.

①妊婦のための栄養教室の資料作成と資料に基づいた栄養教室の実施

②新たな母親学級に向けた指導資料の作成と構築を行い栄養教室の実施

3. 結果と考察

1.東京都 23 区内保健所,分娩取り扱い病産院の調査結果

有効回答率は,都内 23 区保健所 93 施設中 8 施設の回答率 5%,病参院 107 施設中 35 施設の回答率 32%であった.

母親学級・両親学級等の開催は,保健所では 100%再開された.病産院は,現在もコロナ禍の影響によって,時間・人数・内容の削減などの問題点が多く開催は 28 施設 80%,再開を計画したが実施に至らなかった施設が 4 施設 11.4%,中止が 3 施設 8.6%であった.実施方法は,コロナ禍を経験後は多様化した.保健所は全て対面開催であるが,病産院は 11 施設 31.4%が WEB を活用している.指導に栄養・食事の内容を含む施設は保健所 6 施設 75%,病参院 18 施設 51.4%であった.また栄養指導を管理栄養士・栄養士が担当する施設は保健所 5 施設 62.5%,病参院 6 施設 17.1%であった.今後の開催状況には指導時間の確保,講義内容の充実や実習系を増やすことを望む回答が多い.母親学級の必要性は,保健所 100%必要としたが,病産院においては 20%が望ましい,8.6%がなくても良いと回答した.

2. 産婦の妊娠経過中の心身状況と母親学級の受講状況および要望に関する調査結果

調査は 32 名に実施した.食事で気を付けたことは,葉酸やサプリメントの摂取とアルコール摂取が各 21 名,栄養バランス 19 名.母親学級受講者は 12 名で,栄養に関する指導者は,助産師,管理栄養士・栄養士,粉ミルク販売員であった.栄養指導の内容の希望は,体重管理と貧血・摂取が中心であった.受講者の満足度は図 1 の通り,全体に満足していた.

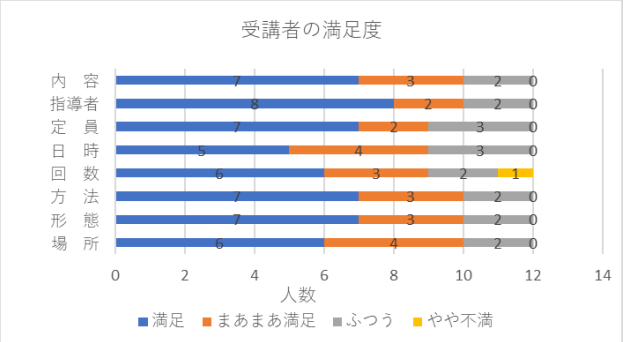


図 1　受講者の満足度

母親学級希望者 3 名,両親学級希望者 14 名.対面希望 26 名であった.SNS などで情報を得ることができるが両親学級は対面での開催が望まれた.

3.妊婦のための栄養教室の資料作成と実施

開催形式はハイブリッド形式で,栄養教室は両親参加型とした.アンケート結果を考慮した内容は,『妊娠前からはじめる妊産婦のための食生活指針』に準じた指導資料を作成し,妊娠の経過をも取り入れて実施した.新しい母親学級の方式と内容についてアンケートを実施し効果の検証を行った.

4. まとめと今後の課題

コロナ禍を経験した母親学級は,開催形式や内容に変化がみられ,受講者の状況にも変化を及ぼした.今後も女性の出産・育児を取り巻く環境は,社会・就業状況の変化,共同育児,SNS の進化などの移り変わりが予測される.産前からの取り組みが進められ,時代に合った母親学級を食事と栄養の視点を取りこぼさず,栄養指導を専門とする管理栄養士によって提案することは,妊婦とパートナーの健全な身体,出産・育児環境,その後の育児食生活に必要であり,望まれていることが示唆された.

主要参考文献

[1]厚生労働省,“令和 5 年 国民健康・栄養調査結果の概要,” 2024.

[2]バイエル薬品株式会社,”コロナ禍妊婦栄養研究白書,”一般社団法人ラブテリ, 01 02 2023. [オンライン].Available: https://www.elevit.jp/sites/g/files/vrxlpx31186/files/2023-03/20230314-survey-report.pdf. [アクセス日:2025].

[3]株式会社日本総合研究所 ,”平成 29 年度　子ども・子育て支援推進調査研究事業,” 株式会社日本総合研究所, 2018.

[4] 三浦麻子 原望 ,他”妊婦のための食習慣支援ツールによる栄養教育効果,” 駒沢女子大学, 2019.

[5]厚生労働省, “妊娠前からはじめる妊産婦のための食生活指針,” 厚生労働省, 令和 3 年 3.

[6] 安川澄子,高田健人他 “妊娠期から子育て期における母親の食知識・食行動と生活習慣　北海道 Y 町の母子保健事業,”日本栄養改善学会,2012.

[7] Benesse, “【新型コロナ】妊婦やママ 4500 名の声「妊婦の夫にも出勤停止要請を」「教育の遅れが心配」など,”14 1 2025. [オンライン]. Available: https://st.benesse.ne.jp/ninshin/content/?id=74041.

[8]高橋悦二郎, “母親学級における精神心理面及び栄養面に関する指導方針に関する研究,” 日本総合愛育研究所, 1987.

腸内環境変化が
小腸上皮細胞の水チャネルAQP3の発現に与える影響

Effects of intestinal environmental changes on the expression of the water channel AQP3 in small intestinal epithelial cells.

西川 真由
Mayu Nishikawa

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 健康・栄養科学専修

キーワード：アクアポリン3，発現制御，炎症性サイトカインTNF-α，短鎖脂肪酸
Key words：Aquaporin3, Regulation of expression, Inflammatory cytokine TNF-α, Short-chain fatty acids

１．目的

アクアポリン(AQP)は，細胞膜に存在して水を選択的に通す水チャネルで，浸透圧差を利用して水の受動輸送を行い，水の分泌，再吸収，その他多くの機能に関わっている．哺乳類であるヒトでは約 13 種類が存在していて，AQP3 は消化管などの上皮細胞に発現し，小腸における水吸収では重要な役割を担っていると考えられている[1]．AQP3 には第 5 エクソンを欠失したバリアント(AQP3-short)が存在しており，小腸上皮細胞株 Caco-2 を低浸透圧環境に置いた時，通常型 AQP3 が減少し AQP3-short の発現が急激に増加することが先行研究で報告されている[2]．また，低浸透圧環境でそれぞれに異なる局在変化を示すことから，通常型 AQP3 及び AQP3-short はそれぞれ異なる機能を持ち，存在比率を調節することで，水吸収を調節している可能性があると思われる[3]．

近年では腸内環境が健康維持に重要とされ，腸内細菌が食物繊維などから生成する短鎖脂肪酸の機能性が多く報告されている[4]．また，腸内の病原性菌による急性炎症は下痢を伴うことが多く，急性炎症による下痢も AQP3 の発現量変化を伴っていることが予想される[5]．しかし，これらの腸内環境変化がどのように AQP3 の発現量変化に影響を及ぼし，更に水吸収の調節に影響を及ぼしているのかは明確となっていない．本研究は，腸内環境変化が，小腸上皮細胞で水吸収を担うと考えられている AQP3 の発現量にどのような影響を与えているか調べ，腸内環境変化が起こすさまざまな細胞反応と水吸収の連携の一端を明らかにすることを目的としている．

２．方法

実験はすべて小腸上皮細胞株 Caco-2 を使用して行い，分化誘導後 1～21 日培養した細胞を用いた．AQP3 およびそのスプライスバリアント AQP3-short の発現量は TaqMan 法による Realtime PCR で，Caco-2 細胞の分化誘導マーカータンパク質の mRNA 発現量は SYBR 法による Realtime PCR でそれぞれ定量した．

１）Caco-2 細胞の分化過程における通常型 AQP3，AQP3-short の発現量の変化．

分化誘導後，1～21 日の細胞を経時的に培養し，2～3 日ごとに培地交換を行いながら，細胞の RNA を抽出して，Caco-2 細胞の分化マーカータンパク質と通常型 AQP3 および AQP3-short の mRNA 発現量を定量し，分化過程における発現量の変化を調べた．また，分化誘導 12 日目，21 日目のそれぞれの細胞について，培地交換後 10～72 時間後の AQP3 および AQP3-short の発現量変化も調べた．

２）炎症性サイトカイン TNF-α が通常型 AQP3，AQP3-short の発現量に与える影響．

分化誘導後 21 日目の Caoc-2 細胞について，炎症性サイトカイン TNF-α が AQP3 および AQP3-short の mRNA 発現量に与える影響を調べた．細胞はメンブレン上で培養し，TNF-α は 1,50,100 ng/mL の濃度で，細胞の上（腸管管腔側），または下（基

底膜側）からそれぞれ添加し, 20 時間培養後 RNA を抽出した.

３）短鎖脂肪酸が通常型 AQP3, AQP3-short の発現量に与える影響.

分化誘導後 21 日目の Caco-2 細胞について, 酢酸, プロピオン酸, 酪酸が AQP3 および AQP3-short の mRNA 発現量に与える影響を調べた. 各短鎖脂肪酸はナトリウム塩として 1 または 5mM の濃度で培地に添加し, 20 時間培養後 RNA を抽出した.

３．結果と考察

１）Caco-2 細胞の分化過程における AQP3, AQP3-short の発現量の変化.

Caco-2 細胞はシート上になってから 21 日間ほどをかけてゆっくりと分化することが知られている. Caco-2 細胞の分化マーカーである Alkaline phosphatase（ALPI）, N-aminopeptidase（ANPEP）, Sucrase-isomaltase（SI）の各酵素の mRNA 発現量を調べたところ, ANPEP は分化誘導後 7 日目, IS は 10～13 日目でピークに達し, その後徐々に減少していたが, ALPI は 7 日目で大きく増加した後 19 日目まで少しずつ増加し, 19 日目でピークに達した後 21 日目でもその値が維持されていた.

一方, 通常型 AQP3 は 10 日目でピークに達した後 13 日目で一旦減少し, その後また徐々に増加して 19～21 日目で最も高い発現量を示した. AQP3-short の発現量変化も同様であった. これらの結果から, Caco-2 細胞は分化の過程で, 7～10 日目にいったん大きな変化が起こり, その後徐々に変化して 19～21 日目で安定した小腸上皮様の性質を示すようになると推定された. AQP3 および AQP3-short は, 小腸上皮細胞としての機能の成熟に伴って発現する機能性タンパク質の 1 つであることが確認された.

２）炎症性サイトカイン TNF-α が通常型 AQP3, AQP3-short の発現量に与える影響.

TNF-α は, 50～100ng/mL 濃度で, 通常型 AQP3, AQP3-short の発現量をともに濃度依存的に減少させる効果があった. 炎症時には AQP3 を介した水吸収は抑制され, 炎症の原因となっているものが素早く排出されることを促していると考えられた.

３）短鎖脂肪酸が通常型 AQP3, AQP3-short の発現量に与える影響.

3 種の短鎖脂肪酸の中では, 酢酸と酪酸が通常型 AQP3, AQP3-short の発現量をともに抑制し, 特に酢酸では強い濃度依存性が観察された. 短鎖脂肪酸は AQP3 の発現量を抑制することによって水吸収を抑制し, 便をやわらかく保つ効果があると考えられた. また, その効果は酢酸でもっとも高かった. 3 種の短鎖脂肪酸で効果が異なったことから, AQP3 の発現制御はこれら短鎖脂肪酸の構造の違いを認識する受容体を介した反応で行われている可能性が示唆された.

４．まとめと今後の課題

通常型 AQP3／AQP3-short 発現量の制御機構は複数考えられる. 先行研究から, 浸透圧変化による通常型 AQP3／AQP3-short の発現量および局在変化はストレス応答 MAPK 経路で制御されている可能性が示唆されている. 本研究の結果から, 浸透圧変化や TNF-α 刺激に対するストレス応答経路の他, 短鎖脂肪酸の受容体として知られる G タンパク質共役型受容体 GPR を介した制御の可能性も示唆された. cAMP 経路もしくは他のシグナル伝達系の経路によって複雑に調節されている可能性があり, AQP3 の制御機構として新たな可能性が示唆されたと思われる. 今後の課題としては短鎖脂肪酸の効果の差に着目し, GPR 受容体の関与についてさらに検討する必要があると考える.

主要参考文献

[1] A. S. Verkman, A. K. Mitra, Structure and function of aquaporin water channels. *Am. J. Physiol. Renal Physiol.,* (2000) **278**(1):F13-28.

[2] 西田真夕, 新規アクアポリン AQP3-short の発現機構解析. 大妻女子大学 卒業論文（2016）

[3] 西川真由, 局在変化から見る AQP3 の性質.大妻女子大学 卒業論文（2022）

[4] Kallie E. Hays, Jacob M. Pfaffinger, Rebecca Ryznar, The interplay between gut microbiota, short-chain fatty acids, and implications for host health and disease. *Gut Microbes*., (2024) **16**(1):2393270.

[5] Nobutomo Ikarashi, *et.al*., Inhibition of Aquaporin-3 Water Channel in the Colon Induces Diarrhea. *Biol. Pharm. Bull*. (2012) **35**(6) p.957-962.

もち性大麦が糖尿病モデルマウスの糖代謝関連臓器の機能に与える影響

Effect of waxy barley on the functions of organs related to glucose metabolism in diabetic model mice

根本 友梨
Yuri Nemoto

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 健康・栄養科学専修

キーワード：もち麦，GLP-1，糖尿病
Key words：waxy barley, GLP-1, Diabetes

１．目的

糖尿病発症ラットにおいて大麦食での血糖値抑制が顕著であること[1], 高脂肪食肥満誘導モデルマウスにおいて β-グルカンを含有する大麦を摂取させると腹腔内脂肪抑制作用，耐糖能改善作用，コレステロール正常化を示すことが明らかになっている[2]．しかし, 糖尿病モデルマウスの糖代謝関連臓器（腎臓, 膵臓, 肝臓）の機能に及ぼす影響, GLP-1 の分泌の関与について検討した研究は少ない．そこで, 本研究では, 糖尿病モデルマウスにもち性大麦（以下, もち麦）を摂取させ, 糖尿病モデルマウスの糖代謝関連臓器の機能に及ぼす影響を検討し, そのメカニズムに GLP-1 分泌が関与するのかを明らかにすることを目的とした.

２．方法

実験 1：5 週齢の KK/Ta マウスを用い, 1 群 8 匹の 4 群に群分けした．短期対照群(SC)群と長期対照群(LC)群の飼料は, AIN-93G 組成を基本とし, 脂肪エネルギー比が 50%となるよう調整した．短期もち麦(SM)群, 長期もち麦(LM)群の飼料は, もち麦を総食物繊維量として 5%となるよう配合した．短期群は 9 週, 長期群は 18 週飼育した.

実験 2：5 週齢の C57BL/6J マウスを用い, 1 群 8 匹の 3 群に群分けした．無処置(S)群と対照(C)群の飼料は AIN-93G 組成を基本とし, 脂肪エネルギー比が 50%となるよう調整した．もち麦(M)群は, もち麦を総食物繊維量として 5%となるよう配合した．C 群と M 群には, 6 週目に streptozotocin(35mg/kg BW)を, S 群は生理食塩水を 3 日間腹腔内に投与し, 12 週飼育した.

実験 3：5 週齢の KK/Ta マウスを用い, 1 群 8 匹の 4 群に群分けした．対照(C)群の飼料は, AIN-93G 組成を基本とし, 脂肪エネルギー比が 50%となるよう調整した．もち麦(M)群の飼料は, もち麦を総食物繊維量として 5%となるよう配合した．DPP-4 阻害薬投与対照群(CA)群,DPP-4 阻害薬投与もち麦群(MA 群)の飼料は, C 群と M 群の飼料にアログリプチンが 0.01%となるよう添加し 8 週飼育した．実験飼料と水を自由摂取させ，体重と飼料採取量を測定した.

解剖の 2 週間前にインスリン負荷試験(ITT)を, 解剖の 1 週間前に経口糖負荷試験(OGTT)を実施した．ITT はインスリン(0.7U/kg BW)を腹腔内に投与した．投与前(0 分)および, 投与後 15 分, 30 分, 45 分,60 分に尾部より採血し, 血糖値を電極法により測定した．OGTT は, 8 時間の絶食後, 20%グルコース溶液(1.5g/kg)を経口投与した．投与前(0 分) , 投与後 15 分,30 分,45 分,60 分,120 分に ITT と同様の方法で採血, 測定した．時間と血糖値変化量の曲線から, 曲線下面積(iAUC)を算出した．解剖時には, 8 時間の絶食後, イソフルラン/炭酸ガスで安楽死させて採血し, 膵臓, 肝臓, 腎臓, 盲腸, 回腸, 腹腔内脂肪を摘出後, 重量を測定した．盲腸内容物からジエチルエーテルで短鎖脂肪酸を抽出し, MTBSTFA で誘導体化後 GC/MS で測定した．また, 盲腸内の GLP-1 プールサイズ, 血清中の GLP-1 濃度とインスリン濃度, アディポネクチン濃度を ELISA 法にて測定した．肝臓からは総コレステロールとトリグリセリドを Folch 法により抽出後, 酵素法で測定した．血清グルコース, トリグリセリド, 遊離脂肪酸濃度は, 酵素法により測定した．さらに, 膵臓, 肝臓, 腎臓, 回腸の機能に関わる mRNA の発現量をリアルタイム PCR 法により

測定した．

３．結果と考察

実験 1：体重増加量，飼料効率では，LC 群と比較し LM 群で有意に低値を示した．膵臓，肝臓，腎臓の臓器重量の群間差は認められなかった．また，腹腔内脂肪蓄積量も同様に LC 群と比較し LM 群で有意に低値を示した．盲腸重量は，SC 群，LC 群と比較し，SM 群，LM 群で有意に高値を示した．しかし，ITT，OGTT の結果では，群間差は認められなかった．また，絶食解剖時の血清インスリン濃度と GLP-1 濃度においても群間差は認められなかったことから，遺伝誘発性 2 型糖尿病モデルマウスのもち麦の耐糖能改善作用は認められなかったと考えられる．一方，膵臓のインスリン合成遺伝子(Ins1，Ins2)の発現は摂取期間に関わらず，もち麦群が対照群より有意に低値を示した．インスリンの過剰合成が抑制されている可能性が示唆された．

実験 2：体重増加量，飼料効率では，C 群と比較し M 群で有意に低値を示した．膵臓，肝臓，腎臓の臓器重量の群間差は認められなかった．また，腹腔内脂肪蓄積量も同様に C 群と比較し M 群で有意に低値を示した．盲腸重量と盲腸内容物中の総短鎖脂肪酸量は，C 群と比較し M 群で有意に高値を示した．絶食解剖時の血清 GLP-1 濃度に有意差は認められなかったが，GLP-1 プールサイズは，C 群と比較し M 群で有意に高値であった．ITT における 30 分値では，C 群と比較し，S 群，M 群で有意に低値を示した．OGTT では，0 分，30 分，120 分値で C 群と比較し，S 群，M 群で有意に低値を示した．解剖時のグルコース濃度は，C 群と比較し M 群で低値を示した．インスリン濃度は，C 群と比較し，M 群で低い傾向を示した（p=0.06）．肝臓のトリグリセリド量は，C 群と比較し M 群で有意に低値であった．膵臓の mRNA の発現量では，膵臓の機能および炎症マーカー(Ins1, Ins2, MafA, GLUT2，PDX1，NeuroD，IL-6，TNF-α，MCP-1)において，群間差は認められなかった．肝臓の mRNA の発現量では，脂質合成に関わる転写因子(SREBP-1c)において，S 群と比較し M 群で低値を示したが，糖代謝関連マーカーでは，群間差は認められなかった．腎臓の mRNA の発現量では，繊維化マーカー(Col1A1，Col3A1，Acta2)において，群間差は認められなかった．回腸の L 細胞の機能に関わる mRNA の発現量では，NeuroD，GPR43，PGCG において，群間差は認められなかった．以上の結果，もち麦の摂取による streptozotocin 誘発性 2 型糖尿病モデルマウスの耐糖能改善作用ならびに腹腔内脂肪蓄積抑制作用が認められた．盲腸内短鎖脂肪酸量の増加と肝臓脂質代謝の改善が認められたことから，肥満の抑制と GLP-1 分泌および短鎖脂肪酸の産生が促進されることで，血糖上昇抑制に影響したと考えられる．

実験 3：体重増加量は，CA 群と比較し MA 群で高値を示した．飼料効率は，C 群と比較し M 群で低値を示した．膵臓，肝臓，腎臓の臓器重量の群間差は認められなかった．腹腔内脂肪蓄積量では，C 群と比較し M 群で低値を示した．盲腸重量は，C 群と比較し M 群で，CA 群と比較し MA 群で高値を示した．C 群，M 群と比べて CA 群，MA 群において血清の DPP-4 活性がいずれの群も約 50%抑制されていた．OGTT の結果では，0 分値，15 分値，30 分値において，CA 群と比較し MA 群で低値を示した．インスリン濃度は，CA 群と比較し，MA 群で低値を示した．GLP-1 プールサイズは，C 群と比較し M 群で，CA 群と比較し MA 群で高値を示した．膵臓の mRNA の発現量では，インスリン合成遺伝子(Ins1)ならびにインスリン転写遺伝子(NeuroD)において，CA 群と比較し MA 群で低値を示した．その他の膵臓の機能および炎症マーカー(Ins2，MafA，GLUT2，PDX1，IL-6，TNF-α，MCP-1)においては，群間差は認められなかったことから，GLP-1 を介したもち麦の耐糖能改善作用が考えられる．したがって，KK/Ta マウスにおいて，もち麦は GLP-1 プールサイズを増加させるが，単独では耐糖能改善作用を発揮せず，DPP-4 阻害薬の併用により耐糖能改善作用が顕在化することが示された．

４．まとめと今後の課題

今後，実験 3 について，糖代謝以外の脂質代謝の解析を行い，研究を完成させる予定である．

主要参考文献

[1] 池上幸江(1991)ラットにおける実験的糖尿病発症に対する大麦の効果．日本栄養・食糧学会誌 44 巻 6 号：447-454

[2]三尾建斗(2019)マウスを用いた大麦摂取による糖代謝・脂質代謝に関する腸管−肝臓−脂肪組織のクロストーク解析．人間生活文化研究　Int J Hum Cult Stud.No29:497-498

日本のポップカルチャーとしての「カワイイファッション」の形成と社会的影響

The Formation and Social Impact of “Kawaii Fashion” as Japanese Pop Culture

佐久間 桃花
Momoka Sakuma

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 生活環境学専修

キーワード：服飾文化史，カワイイファッション，ポップカルチャー
Key words：History of clothing, Kawaii Fashion, Pop Culture

１．目的

「カワイイカルチャー」は，日本のポップカルチャーの 1 つである．2009 年には外務省が，「カワイイファッション」を文化外交に活用するために「ポップカルチャー発信使（通称：カワイイ大使）」を制定した．また，経済産業省は 2011 年にサブカルチャーを政策の一部に取り入れた「クール・ジャパン戦略」を発表した．フランスで開催される日仏文化交流事業「JAPAN EXPO」でも取り上げられる等，日本文化として世界的に認知されている．

「カワイイカルチャー」は，マンガやアニメ，音楽などの様々なコンテンツで構成されているが，本論ではこのうちの 1 つである「カワイイファッション」を取り上げる．このファッションは，1970 年代以降の原宿を中心としたストリートファッションが源流である．1990 年代に奇抜なスタイルが話題にもなり，2000 年代にかけてスタイルの細分化が進んだ．

「カワイイ」の語や文化においては，語の持つ意味や心理的効果，少女文化，原宿との関係性，海外発信，経済効果など，様々な観点から研究が行われている．しかし「カワイイファッション」については，カワイイカルチャーの一部として取り上げられ，ファッションスタイルも「ロリータ」等の代表的なものに限定されるケースが多く，語の定義は曖昧であった．

本研究では「カワイイファッション」が「カワイイカルチャー」として形成されていく様子を明らかにすると共に，ファッションスタイルの整理を行う．また，日本語の形容詞である「かわいい」が「カワイイ」という概念へと変化していく過程や，それらが社会に与えた影響について，原宿の変遷や社会背景と照らし合わせながら明らかにする．

２．方法

資料として，新聞，雑誌 5 誌，ストリートスナップ 20,148 枚，外交青書を使用した．新聞は，大妻女子大学図書館データベースに保存されている読売新聞，日本経済新聞，朝日新聞，毎日新聞の記事を使用した．雑誌は，国立国会図書館に所蔵されている 2000 年～2024 年までの『Fruits』『KERA』，『LARME』，『原 J』の 4 誌に加え，原宿の最新情報が掲載されている冊子『HARAJUKU POP MAGAZINE』を資料とした．ストリートスナップについては，共立女子大学の渡辺明日香教授からご提供いただいた 2009 年～2023 年までの原宿で撮影された写真を使用した．

資料は，以下の方針に沿って整理した．

（1）戦後から現在に至るまでの，原宿の街の変化を商業施設や担い手に着目しながら整理した．

（2）大正時代に誕生した少女文化が「カワイイ文化」へと成長し「カワイイカルチャー」へと発展していく流れを追った．

（3）カワイイカルチャーが海外へ進出していく様子や経済効果について整理した．そして海外進出，日本の行政の動き，地域活性化や企業戦略に活用される流れの 3 つに分けて研究を行った．

（4）2000 年～現在までのカワイイファッションのスタイルの変遷をまとめた．新聞，雑誌，ストリー

トスナップの 3 つの媒体それぞれに現れたスタイルの比較分析も行った．

３．結果及びまとめ

本研究から得られた成果は，以下の５点である．

1,「カワイイファッション」の定義

「カワイイファッション」の語は， 2008 年の新聞で初めて使用された．その特徴からコスプレと混同されることが多いが，着用者にとっては日常的な服装である．時代と共に意味が変化し，1980～2000 年代は奇抜なスタイルを，2009 年以降は「ロリータ」や「ゴスロリ」などの特定のスタイルを表していた．現在では原宿を超えて新宿や高円寺，海外等でも発展しカジュアル化が進んだことから，「日本的な要素」（幼児性やマルチミックス性，西洋社会におけるドレスコードの逸脱等）を含んでいるスタイルが「カワイイファッション」と呼ばれている．

2,「カワイイファッション」が誕生・発展した経緯，社会背景

1970 年代頃から原宿の若者達によって生み出され，1980 年代には装飾的でロマンティックな要素が特徴のストリートファッションが広まった．1990 年代には，青文字雑誌の影響でストリートスナップが流行したことにより，過度な装飾や色彩が特徴のスタイルが続々と誕生した．その奇抜さは社会から「不思議な若者文化」として評価された．2000 年代には原宿を拠点に多くのスタイルが生まれたが，2009 年の「カワイイ大使」就任を期に「ロリータ」が代表格となった．その後，インターネットの普及により，原宿以外でも発展し，日本文化の一部として世界的に注目されるようになった．

3,「カワイイファッション」と呼ばれるファッションスタイルの時代的変遷

本論では，資料を基に「カワイイファッション」を計 29 個，細分化すると 65 個確認した．1970 年代には子供服を大人が着用するスタイルが登場し，1980 年代には「ゴスロリ」「パンク」などに類似したスタイルが見られた．1990 年代にはそれらのスタイルが確立すると共に「ヴィヴィ子」「女児系」などが登場した．2000 年代にはそれらをミックスした「ロリータ」や「デコラ」などが誕生し，2010 年代には「病みカワイイ」などサブカルチャー（以下サブカル）要素の強いスタイルも現れ始めた．現在ではスタイルのカジュアル化が進み，新たなスタイルが確立されている．「ロリータ」は「NEO ロリータ」や「中華風ロリータ」などを生み出し，「ゴスロリ」や「パンク」は「地雷系（トー横界隈）」などを誕生させた．一方で「デコラ」は，より装飾的な「NEO デコラ」へと発展を遂げている．

4,「カワイイファッション」が日本のポップカルチャーとして形成された経緯

「カワイイファッション」は，日本のアニメを通じて幼少期からファッションを含む日本文化に触れていた外国人が評価したことで，価値が見出された．海外での評価を受け，日本政府が「クール・ジャパン戦略」等の文化外交に「カワイイファッション」および「カワイイカルチャー」を取り入れたことで，日本を代表するポップカルチャーとして認められた．

5，日本語の「かわいい」が「カワイイカルチャー」として変容する経緯

大正時代から戦前にかけて少女文化が発展し，1950 年代半ばに内藤ルネが「可愛らしいもの」をキーワードに新しい価値観を提案した．1970 年代には，ファッションやキャラクターグッズの登場により「カワイイ文化」が確立した．1990 年代には大人もキャラクターグッズや人形を楽しむことが普通になり，新聞でも「カワイイ文化」と紹介された．2000 年代に入ると海外では「kawaii」という英語表記が日本のポップカルチャーと共に広まっていった．2009 年の「カワイイ大使」制定を機に，原宿の若者文化やストリートファッションを象徴する言葉として国内でも広く定着した．これにより，「カワイイ」はポップカルチャーを示す固有名詞となり，日本のポップカルチャーとして国内外で認知されるようになった．

主要参考文献

[1] 渡辺明日香『ストリートファッション論 ： 日本のファッションの可能性を考える』産業能率大学出版部出版，2011 年
[2] 櫻井孝昌『世界カワイイ革命 ： なぜ彼女たちは「日本人になりたい」と叫ぶのか』PHP 研究所，2009 年
[3] 石田かおり「日本のカワイイ文化の特質・来歴とその国際的発信について」，19 号，駒沢女子大学研究紀要，2012 年，57-68 ページ

保育行為にみられる保育者の「遊び心」

The characteristics of daycare teacher`s playful mind concerning teacher-child interactions

笠原　麻衣子
Maiko Kasahara

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 保育・教育学専修

キーワード：保育者，保育行為，遊び心，実践
Key words：Daycare teacher, Teacher-child interaction, Playful mind, Practice

１．問題と目的

保育者が，日常的な子どもとの関わりにおいて，おどけたり，ふざけたりするような行為をみせることがしばしばある.このような保育行為を一旦，保育者の「遊び心」という行為としてみていく．保育行為について小川（2000）が「保育という営みは，複数の幼児が同時に動き出したのを見て，保育者がその実態を把握し，援助の必要性の優先順位を見極めた上で，援助行為を組み立てていく営みである」と述べているように，保育者は“状況に応じた適切な関わり”をすることが求められ，その保育行為の具体的な内容は，多岐に渡る．保育者の「遊び心」とは，このような“状況に応じた適切な関わり”である保育行為の一つであると考える．

「遊び心」の定義（中野（1996））
「いわゆる‘してはいけない’遊びとされてきた、『ふざけ』『おどけ』『冗談』『からかい』『いたずら』などは、『遊び心』に満ちた行為」 「『遊び心』とは、作者の遊戯的企み・試みが何らかの受容可能な形で表現されている」

表 1.中野（1996）「遊び心」の定義

「遊び心」の「心理的特徴」（中野（1996））
(1)第一に、それらの行為自体は、遊びとしてだけでなく、意地悪、攻撃などの悪意ある行為としても用いられうる＜二面性＞を持つ点
(2)第二に、しかし、実際は、相手との＜相互的楽しさとその満足感＞を追求するコミュニケーションである点
(3)第三に、したがって、それが遊び心に根ざしたものであることが受け手に受け取り可能(acceptable)であるという行為者の信念と、その行為の意味を遊戯的に解読すべきであるという受け手の読み取りが成立しなくてはならないこと、＊すなわち、両者の＜間主観(体)的関係＞(intersubjectivity:Trevarthen,1978)、または＜通底性＞が必要な点。
(4)第四に＜親しい間柄＞(冗談の通じる関係：joking relationship:Pawluk;1989)ほどよく用いられる。すなわち、相手との＜親しさと一体感＞の表明と言える。
(5)第五に、それでも、その行為が、行為者の遊び心の表れであることが受け手に伝わらない場合には、そこでのやりとりは、常に「いざこざ」や「不快な状態」に＜分岐＞してしまう可能性を帯びている点
そして、「遊び心」に満ちた行為のやりとりの過程では、上記のような特徴によって、ランダムに生じる偶然の出来事が、予期せぬ方向へと導くような可変的な文脈から成っている

表 2.中野（1996）「遊び心」の「心理的特徴」

しかしながら，保育者の「遊び心」という行為において，その重要性を指摘しながらもこれまでの先行研究において明らかにされていない．中野（1994）は，これまでの「遊び」研究においては，からかい，いたずら，わるふざけのような“望ましくない”遊びなどは排除されてきたと批判した．その上で，母子間における「遊戯的からかい」の研究を踏まえ，中野（1996）において，表 1・2 のように「遊び心」の定義と「遊び心」の「心理的特徴」を 5 つに整理している．

そこで本研究では，中野（1996）で示された「遊び心」の定義と「遊び心」の「心理的特徴」5 つに依拠し，保育行為における保育者の「遊び心」の特徴を明らかにすることを目的とする．

２．方法

本研究では，日常の保育実践から保育者の「遊び心」の特徴を明らかにするため，対象となる保育者は 1 名とした．対象となる保育者は，経験年数 22 年の（仮名）佐藤先生である．日中の保育の映像記録を撮影し，その後，保育者が当該日の保育を振り返るインタビューにおいて「遊び心」ある関わりを語ってもらい，「遊び心」の定義に該当する箇所を「遊び心」ある関わり場面とし分析の対象とした．また本研究では，保育者の中野（1996）の「遊び心」の「心理的特徴」として整理に至った中野（1995）から，「遊び心」の「心理的特徴」のカテゴリー・ラベルを生成し，「遊び心」ある関わり場面の観察事例や観察事例に関わるインタビューの語りにおいて，本研究で生成した「遊び心」の「心理的特徴」のカテゴリー・ラベルを当てはめることを通して，保育者の「遊び心」の特徴を検討した．なお，取り上げた事例は全部で 20 事例（うち 2 事例については例外）となる．

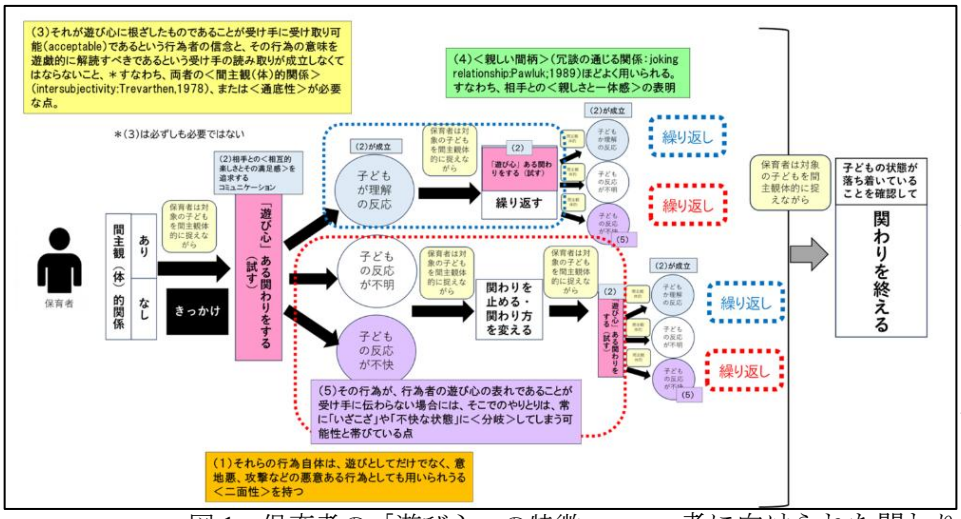


図 1．保育者の「遊び心」の特徴

3．結果及び考察

中野（1996）を思考モデルに保育者の「遊び心」の特徴を整理すると，図 1 のようになる．

保育者は，子どもの状態を間主観体的に捉えながら，「遊び心」ある関わりをしている．それは，「相手との＜相互的楽しさとその満足感＞を追求するコミュニケーション」を意味していた．（図中⑵）ただ，「両者の＜間主観(体)的関係＞または＜通底性＞が必要な点」に関しては，保育者の場合，母子間とは異なり，「必要な点」ではなかった．むしろ子どもの状態を常に間主観体的に捉えながら，関わりを続ける・止めるなどの姿，すなわち，子どもの状況に応じた保育行為の一つであることが明らかになっている．

観察事例 20 においてその大半を占める 14 事例は，“きっかけ”が「対象の子どもの不快，あるいは危険になる可能性がある状態」（10 事例）と「対象の子どもが不快な状態」（4 事例），いわばネガティブな状況であった．その時の関わりへの動機（意図）は，「遊び心」ある関わりを介して子どものネガティブな状態を改善させたかったと考えられる．

また，残りの 6 事例中の 4 事例については，必ずしも子どもの状態を前提としていない（=「不快」といったネガティブな状況として捉えない）状況であった．この場合の関わりへの動機（意図）は，“楽しさを共有したい”気持ちを持って関わっていたと考えられる．

最後に 2 事例については，18 事例とは異なり特定の子ども－保育者間で生起したやりとりではない．具体的には 2 事例中 1 事例は対保育者に向けられた事例であり，今一つは，当該の子ども－保育者から始まった関わりが，結果的に，当該の子ども－別の子どもへと「遊び心」がいわば伝播したような事例となっている．

本調査においては，保育者の「遊び心」が見られない・語られない日が存在していたが，前述した保育者に向けられた関わりについても，その背景として，保育者の気持ちに対する余裕が関係していると考えられる．保育者の「遊び心」ある関わりは，いわばその場にいる保育者・子どもなど，その“場”を共有している人を意識した関わりとしてみられる可能性があると考えている．

また，当該の子ども－別の子どもへと「遊び心」がいわば伝播したような事例を挙げたのは，先に「結果的に」と記したように，保育者の「遊び心」ある関わりが，久保（2024）の指摘する中動態としての在り方から，子どもへの遊びに発展していく可能性があると考えたからである．

4．まとめと今後の課題

本研究の結果の妥当性を精査するために，他の保育者の保育行為における「遊び心」の特徴を積み重ねていく必要がある．また，保育者の「遊び心」ある関わりには，「その“場”を共有している人を意識した関わり」・「子ども同士の遊びに発展」する可能性が見出され，今後，さらに検討していく必要があろう．また，いわゆる“望ましくない”とされてきた遊びの側面における「遊び心」ある行為が，保育者の専門性を踏まえた上では，むしろ必要な保育行為として考えられる可能性についても深めていく必要があろう．

主要参考文献

[1]中野茂（1996）遊びの発達学基礎編　培風館　2 章 遊び研究の潮流　pp21-60
[2] 小川博久（2000）「保育援助論」萌文書林
[3] 久保健太（2024）「生命と学の哲学―育児と保育・教育をつなぐ」北大路書房

「痴人の愛」における創られた女と移動

大野　愛結
大妻女子大学大学院　人間文化研究科　言語文化学専攻　日本文学専修

キーワード：ジェンダー、ポストコロニアル、谷崎潤一郎

一　目的

谷崎潤一郎「痴人の愛」（『大阪朝日新聞』一九二四年三月二〇日～六月一四日、『女性』一九二四年一一月～一九二五年七月）は、前期における集大成的な長編であるとされている。関東大震災後に、アメリカ的風潮が流れ込んできた時代の先端を行くタイプとしてモダン・ガールなるイメージが派生したが、ヒロインであるナオミはその典型として表象される。ナオミには白人憧憬、母性思慕、破滅願望が投影され、聖母と悪女の両義性が投影された娼婦的ヒロイン像として配置されている。

「痴人の愛」研究において、ヒロインのナオミと語りの譲治が持つ二項対立の構造と逆転の力学はこれまでにも多く指摘されてきた。これを踏まえて、様々な場所を移動するテクストの構造に着目し、ナオミという娼婦的ヒロイン像の形成に移動の力が関係していることに着目したい。本研究は、ジェンダー論とポストコロニアル論を用いて、「移動」という力がどのように作用してナオミという娼婦的ヒロイン像を創造しているのか、権力構造の関係を新たに検討することが目的である。また、テクストで明確に主題とされている「西洋」はアメリカとヨーロッパとが混じり合う曖昧な概念となっており、ナオミに欲望される「西洋」はどのように娼婦的ヒロイン像を形成しているのか、併せて検討する。

二　方法

どこか定まった場所に住まうことが、さまざまな状況のなかで人びとにとっての常態ではなくなったこと、移動があらためて場所という問題を提起するようになってきたことにより近代の国民国家を問い直したポストコロニアルの理論を応用する。また、テクスト内でナオミと譲治が移動する場面を引用し細かく分析する。それに先立ち、土地や同時代における文化的背景がどのようにナオミに結びついているのか先行研究を参照し検討する。

三　結果と考察

「痴人の愛」において物語の始まりである浅草を分析したところ、娼婦的ヒロイン像を形成するための種が見られた。

同時代に浅草芸妓街の改造を経済学の視線から論じた石角春之助は、現在の浅草が萎れているのは上品ぶるからだと前置きし、浅草の発展の可能性を秘めているのは言うまでもなくカフェだと述べている。フラッパー・ガールの底抜け散財のように騒げ、踊れ、跳ねろと主張し、次いで千束町は特に改造を急ぐべきであると言う。千束には浅草の発展に影響を及ぼす浅草女が集中していることが理由であり、彼女たちをウルトラ、モダンたらしめることが希望を与え、インテリやブルジョワを吸収できると述べる。しかし、それには黒髪が邪魔で、左裾を捨てろ、三味線を破ってチャールストンでも踊れ、勇敢に男性的にフラッパー・ガールの標本を示せと叫んでいる。フラッパーとはアメリカで一九二〇年頃に流行した新しい女を指すスラングであり、石角が論じた一九三〇年代には浅草と千束町の芸妓にはそれが必要であると言うのである。

ナオミの出自である千束町、そして芸者になることを拒否し女給として働いていたカフェにはいずれ「アメリカ」の風俗が流入してくることは必然だったのであろう。これを踏まえると、テクスト内で譲治の家父長的な教育により「西洋」らしくナオミが徐々に変化していくにも、「ヨーロッパ」ではなく「アメリカ」の要素が強く表象していることは「痴人の愛」におけるナオミという娼婦的ヒロイン像の形成に、第一章から要素として内在したことが同時代の風俗評から明白である。

各場面を分析した。テクストの終盤、ナオミの場所が不定となる場面がある。そのときナオミが一人で訪れていた横浜が、譲治とナオミにとって最後の移動になる。一人で訪れ、西洋人との交流を密にしていたナオミは、更に西洋の記号が強く与えられており、「痴人の愛」における娼婦的ヒロイン像として確立しているだろう。譲治はここで完全に力学の逆転でナオミに権力を渡している。しかしながらそれは本テクストの法律であり、娼婦的ヒロイン像に権力を渡しているようで、ヒロインは渡されている。能動的なようで、受動的な存在としてヒロインがテクストに女性表象として表れていることは否定できないだろう。

「痴人の愛」では、「移動」という力を用いて娼婦的ヒロイン像が強固になっていく。テクスト内での「移動」が権力構造を持ち、ナオミという娼婦的ヒロイン像の形成に直結していると分析することができた。

四　まとめと今後の課題

「痴人の愛」におけるナオミという娼婦的ヒロイン像は、物語の始まりの場所である浅草の時点から、アメリカの要素と接続している。女給、カフェ、そして吉原へ行く際に通る千束町が、欲望し消費されるモダン・ガールや娼婦の要素をナオミに初めから与えていることが分かった。特筆して浅草という場には、土地に結び付く風俗が娼婦的ヒロイン像の要素として、あるいは舞台装置の種として内在しているのである。

「痴人の愛」は、物語の始まりである浅草から最後の横浜・本牧へと、様々な土地の移動を通じて娼婦的ヒロイン像の両義性である聖母／娼婦それぞれの面を強固にしていく。移動の場所ごとに娼婦的ヒロインの要素が与えられていくが、特段大きな変化を物語上で起こすのは二度目に鎌倉を訪れた一五章であろう。譲治が留守の際に、ナオミが謀って熊谷らと遊んでいたことが露見することで、明確にナオミの娼婦的振る舞いが描写されるが、この鎌倉で娼婦的ヒロイン像が覚醒したのではない。一四章で浅草に戻った場面で、土地に結び付く風俗が娼婦的ヒロイン像を強固にしており、その時点から覚醒していたのである。言うまでもないが、聖母的側面が描写される際もその両義性により娼婦的ヒロイン像は創られていく。本研究では、ポストコロニアルの観点から「移動」という力を利用し娼婦的ヒロイン像が覚醒していき、「痴人の愛」研究における権力の交代というこれまでの言説のなかに「移動」という力が欲望と消費を孕んで内在していたことを明らかにした。

西洋の文脈で生まれたファム・ファタールという女性表象で本研究を行うことも考えたが、ファム・ファタールと谷崎作品を結び付けて研究するには広く国際文化の分析も必要であると判断したため、今回の研究では文化を固定せず女性表象として用いることができる娼婦的ヒロイン像という語を使用した。しかし谷崎潤一郎作品には、初期作品から中期作品まで西洋憧憬の娼婦的ヒロイン像が表れる。悪魔主義や耽美派と謳われていた谷崎の作風は、後期から晩年にかけて純日本美へと古典回帰していく。西洋憧憬はテクストに表われなくなったかのように思えるが、谷崎の老衰により口述筆記となった『瘋癲老人日記』にも娼婦的ヒロイン像は表れており、西洋憧憬が結びついた娼婦的ヒロイン像は晩年までテクストに表れている可能性もあるのではないかと考える。今後は手を広げ、この問題について研究したいと考える。

主要参考文献

（一）石角春之助『浅草経済学』「第一章　経済学的に観た浅草の将来」（文人社、一九九三）
（二）伊豫谷登士翁・平田由美編『「帰郷」の物語／「移動」の語り　戦後日本医おけるポストコロニアルの想像力Narrating Mobilities, Narrating "Home"-comings』（平凡社、二〇一四）
（三）五味淵典嗣『言葉を食べる――谷崎潤一郎、１９２０～１９３１』（世織書房、二〇〇九）

The Created Woman and Mobility in *Naomi*

Ayu Ono

Key words：Gender, Postcolonial, Tanizaki Jun'ichiro

多義的別義の関係性
—「招く」の意味を考察対象として—

The relationship between polysemy and different meanings
—With "maneku" (to invite) as the subject of consideration —

栗田 優羽
Yu Kurita

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 日本文学専修

キーワード：多義語，統合モデル，動詞
Key words：Polyseme, Integration models, Invite

１．研究目的

本研究は認知言語学とプロトタイプ理論の 2 つの考え方に基づき,多義語の意味の関係性を動詞「招く」を中心として明らかにすることを目的とする.研究対象として「招く」を選んだ理由は,「招く」には複数の意味が認められ,多義語の意味拡張を捉えるのに適していること,にもかかわらず「招く」についての考察がこれまであまりされてこなかったことにある.意味ごとに異なる特徴を持つ「招く」の多義的別義を明らかにすることを第 1 の課題とし,その上で,別義の関係を考察することにより,人間が具体的な事象と抽象的な事象に対してどのような共通点を見出し,意味を拡張させているかを明らかにすることを第 2 の課題とする.

２．調査

2 つの課題を明らかにするため,本研究では「招く」の多義と考えられる意味の特徴などを実例観察に基づき記述した.記述の方法は以下の手順により行った.

・「招く」の実例収集（BCCWJ コーパスにより約 252 例,メディアの実例などを収集）
・「招く」の多義的別義の分類（データによりながら微妙な意味の違いは筆者の内省判断により分類）
・「呼ぶ」「もたらす」等の他の語に置き換えた時の意味的な違いの分析を発表者の内省により分析

３．調査の結果と考察

第 1 の課題について,調査の結果筆者が「招く」の多義的別義として設定するのは次の 6 種である.以下,意味記述・その省略記述（省略形）・例・意味の特徴の順に記す.

意味①〈主体が〉〈客体に〉〈自分領域への移動を〉〈促す〉（省略形：①移動型）（理論的プロトタイプ）
（1）太郎が花子を招く.（作例）
特徴：《自分領域》に客体の移動を促す意図を持つこと,最も典型的な動作は森田（1989）の主張する手首を上下に振る動き,最も典型的な《自分領域》は主体の側.

意味②〈主体が〉〈外部にいる客体に〉〈場に来る（参加する）許可を出す〉（省略形：②許可型）
（2）太郎が花子を結婚式に招く.（作例）
特徴：主体の《自分領域》に《外部の人間》を招待すること,〈招く場の準備が整っている〉というフレーム（《準備行為》《準備結果状態》を持つ.

意味③〈主体が〉〈外部にいる客体に〉〈主体の求めた役割として〉〈場に来る（参加する）許可を出す〉（省略形：③許可役割型）
（3）太郎は花子をピアニストとして結婚式に招く.（作例）
特徴：主体が《自分領域》に《外部の人間》の移動を促す意図を持つこと,来た客体に役割を要求すること,〈わざわざ外部から来ていただく〉という要素を含む.

意味④〈X によって〉〈事が〉〈発生する〉（省略型：事態誘発型）
意味④a〈人間の行為によって〉〈事が〉〈人間に発生する〉
（4）発言が誤解を招く.（作例）
特徴：［活動］によって事態が引き起こされること.
意味④b〈慣習的な物の効果によって〉〈（外部にある）事が〉〈人間に発生する〉
（5）ルビーが幸運を招く.（作例）
特徴：ガ格とヲ格が認識や背景次第で変えられること,ヲ格について身の内にある物は共起しづらいこと.
意味④c〈人間の管理できない事によって〉〈事が〉〈人間に発生する〉
（6）日照りが飢饉を招く.（作例）
特徴：ガ格に［活動］がないこと,因果応報的な解釈が見られないこと.

これらの 6 種の多義的別義を認定し,第 2 の課題として別義の関係性を分析し,どのような理論的モデルで説明できるかを考察した.まず,各意味の関係性についての考察結果を以下に示す.
①移動型と②許可型の関係性：メタファースキーマ：〈合図／意図の伝達によって,客体を《自分領域》に来させる〉
②許可型と③許可役割型の関係性：シネクドキースキーマ：〈主体が客体へ場に参加する許可を出す〉
②許可型のフレーム《準備行為》と④a 活動型の関係性：メタファースキーマ：《準備行為》（次の段階が発生するための成立条件を揃えること）
①移動型と④b 物型の関係性：メタファースキーマ：《《目印》の所有者へと外部にあるものが移動する〉
②許可型のフレーム《準備結果状態》と④c 非活動型の関係性：メタファースキーマ：《準備結果状態》（人間の行為なく次の段階が発生するための成立条件が揃っていること）
スーパースキーマ：〈因果関係〉

以上は籾山（2021）の統合モデルで説明できる,これを示したのが図 1 である.図 1 では,シネクドキーは実線,メタファーは点線,《準備行為》のフレームは実線の丸,《準備結果状態》のフレームは二重線の丸で示している.

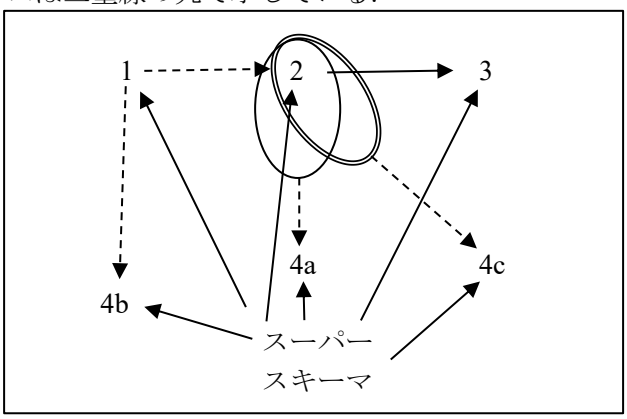


図 1.「招く」を統合モデルで示した図

4．まとめと今後の課題

本研究では,第 1 の課題として「招く」の多義的別義を明らかにすることをあげた.考察の結果「招く」を①移動型,②許可型,③許可役割型,④事態誘発型に分類し,特に④事態誘発型を,原因を表すガ格の特徴や因果関係の特徴を基に④a 活動型,④b 物型,④c 非活動型の 3 つに分類した.

また,本研究は第 2 の課題として「招く」の多義的別義の関係性を明らかにすることをあげ,「招く」の意味がスーパースキーマとして〈因果関係〉を持つことを主張した.

本研究はプロトタイプ的意味の認定について田中（1990）の「理論的プロトタイプ」を用い,①移動型と認定した.「心理的プロトタイプ」の概念を用いた場合に本研究とどのような違いが明らかになるのかは今後の課題である.

主要参考文献

[1]森田（1989）「呼ぶ」,『基礎日本語辞典』,角川書店,pp.1194-1198.
[2]籾山（2021）『［例解］日本語の多義語研究―認知言語学の視点から―』,大修館書店.
[3]田中茂範（1990）『認知意味論　英語動詞の多義の構造』,三友社出版,pp.100-104.

付記

本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所の研究助成（2022 年 DB2215「多義語の意味拡張と意図性についての研究」）（2023 年 DB2315「多義語の意味拡張と意図性についての研究」）を受けたものです.

『女子文壇』における投稿
―「書くこと」をめぐる女性達の誌上通信―

森　美幸
大妻女子大学大学院　人間文化研究科　言語文化学専攻　日本文学専修

キーワード：女子教育、女性雑誌、投稿

一　目的

本研究では女性投稿雑誌『女子文壇』内の「誌友倶楽部」欄における投稿することの意義について研究する。

『女子文壇』は一九〇五（明治三八）年から一九一三（大正二）年までの八年間に刊行された女子教育の隆盛と新聞・雑誌の投稿ブームの中で生まれた女性の投稿雑誌である。文壇が男性中心であった近代において、「投書は女子に限る」と明記した『女子文壇』は、この方針により大量の女性読者や投稿家を獲得した。

『女子文壇』では投稿欄と「誌友倶楽部」という誌友欄が特色として人気を博しており、女性達は誌上での交流と文通や物の交換等の交際を多く求めた。

本研究では『女子文壇』を対象に、女性たちがどのように「書くこと」で交流しコミュニティを形成したのかについて考察する。また、メディアからの発信に女性たちがどう反応していたのかについても考察する。

二　方法

始めに近代の女子教育に関する先行研究を整理し、近代女性の社会的立場を把握した上で、『女子文壇』がどのような文学的立ち位置にあるかを確認した。

次に『女子文壇』内の誌友欄「誌友倶楽部」を精読した。具体的には、ジャンルの発生や変遷を小見出しや記者と読者の交流から辿り、女性達が投稿することの意味や『女子文壇』に集まる理由に着目して論じた。

最後に「誌友倶楽部」欄の廃止や『女子文壇』廃刊後の女性達がどこへ向かったのかについて、先行研究を基に考察した。また、『女子文壇』が果たした成果や、女性にとって書くことや誌上での通信はどのような意味があったのかを考察した。

三　結果と考察

第一章では、女子教育の需要の高まりで女子教育が発展していくことが分かった。女学校は「女学生」というイメージを作り上げた。雑誌は「女学生」の声を交信させる場として彼女達を引き寄せ、また学校教育を受けられない人にとっての「学校」として女性読者を獲得していった。これは『女子文壇』でも同様である。しかし、近代女性が受けられる教育は男子と比較して格差があり、また女性雑誌に関しても男性が特権を持っていた。他にも「誌友倶楽部」は文章の上達や稽古の場ではなく交流を楽しむ場所であると述べる先行研究が多く見られた。

第二章では、誌友倶楽部の目的について交際や物の交換、記者に対しての要望などを伝える場所として適切であるとし、誌友の声が直接誌面に掲載される場所をメディア側から推奨・提供していた。記者の誠実な対応や地方においても他雑誌と比べて入手が可能であることが評価され、愛読者が増加していたことが読者の投稿から分かった。「誌友倶楽部」の投稿が増加すると、ジャンル分けが行われ小見出しが発生した。この小見出しの名称や欄内の位置は変動しており、号や年によってより細分化や逆に省略化も起きた。「誌友倶楽部」では、投稿は女性だけである筈の雑誌に女性に扮して投稿する男性や投稿欄で見つかった剽窃された文章の告発も行われていた。また、交際や交換でも女性の振りをする男性や「物品の只取り」の注意も相次ぎ、「誌友倶楽部」の隆盛と共に問題が浮上した。これら

に対する記者の対応も曖昧なものでやがて誌上のみでの交際や、学校や地域間でのグループ活動が中心になるに連れて、「誌友倶楽部」の衰退が見られる様になった。その後も絶えず女性達の投書はあったものの、予告なしに突然「誌友倶楽部」は廃止した。

第三章では、「誌友倶楽部」と合併された「大波小波」と後継と思われる新しい欄の「群星」を読み、「誌友倶楽部」との違いを見た。『女子文壇』が廃刊した理由が掲載された明確な文章は読み取れなかったが、『青鞜』を始めとした女性問題が議論を呼び雑誌への視線が厳しくなっていたことが一因であった。第九年には発売禁止処分が下されたこともあり、社会からの視線に答えて文学雑誌から婦人雑誌へと転化しようとした『女子文壇』は、読者の要求に応えきれていなかった。廃刊後、女性達は他の雑誌へ移った可能性が高く、一部の寄稿家へ上昇した投稿者らの中には編集に携わっていく女性もいた。女性達は「書くこと」でグループ化され新たな雑誌への投稿に繋がっていた。『女子文壇』がなくなっても、そこで得たものを基に、彼女達は別の雑誌メディアへと歩み続けたのである。

四　まとめと今後の課題

「誌友倶楽部」は沢山の女性読者の声が詰まっている。投稿者というのは厳密には採用された投稿であり、実際には計り知れないほどの便りが送られている。

彼女達は投稿や活字メディアに触れることも困難であったが、記者や他の読者と共に交流を深めながら「誌友倶楽部」を栄えさせた。やがて読者は「書くこと」で自分を表現することが可能になり、生活や社会にまで言及できる程に文章と思想を練ることが出来た。また、現実での交流は誌上での見えないコミュニティではなく現実のものとして彼女達をより結び付けた。その繋がりは『女子文壇』が終わっても別のメディアへの参入を可能にした。

本研究では「誌友倶楽部」の全てを追えた訳ではなく、まだ調査や考察の余地は多いだろう。

主要参考文献

（一）渡辺澄子「解説」『解説・総目次・索引』（『女子文壇』復刻版別冊Ⅰ）（不二出版、二〇〇五年）
（二）稲垣恭子『女学校と女学生』（中央公論新社、二〇〇七年）
（三）小平麻衣子『女が女を演じる　文学・欲望・消費』（新曜社、二〇〇八年）
（四）本田和子『女学生の系譜・増補版　彩色される明治』（青弓社、二〇一二年）
（五）飯田祐子『彼女たちの文学　語りにくさと読まれること』（名古屋大学出版会、二〇一六年）
（六）小山静子『高等女学校と女性の近代』（勁草書房、二〇二三年）

Posts in “Jyoshibundan”
—Magazine correspondence of women regarding “writing”—

Key words：Girls' education, women's magazines, posts

台湾における服務文化

Service culture in Taiwan

廣野 朱音
Akane Hirono

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 国際文化専修

キーワード：台湾，服務，文化
Key words：Taiwan, Service, Culture

はじめに

2020 年の台湾に留学した際，台湾には，客に対してフレンドリーに接する店員が多いと感じた．一方で，日本には「お客様は神様」という言葉があるように，客は店員より立場が上で，店員は客より立場が下であるという考え方があるため，客に対してフレンドリーに接する店員は少ないと思われる．

以上のように，台湾と日本では，服務（サービス）が異なっていると考える．台湾と日本の服務文化の違いには，台湾では「ヨコ社会」，日本では「タテ社会」が形成されていることが関係しているのではないだろうか．

本稿では，台湾の服務文化の特徴について，筆者のフィールド調査に基づいて考察したい．このことにより，台湾の服務の本質を明らかにできるだろう．そして，台湾の服務文化の日本への導入を提案したい．

第 1 章　台湾の服務文化の現状

第 1 節　フィールド調査

台湾でフィールド調査を行った「我的小館」，「拾汈茶屋」，「鼎泰豐」，「迷客夏」，「思夢樂〔しまむら〕」，「すき家」を取り上げた．

「我的小館」の店員は客に対して接客とは関係のない内容の質問を何度もし，さらには営業中に客が食事をしている同じ場所で堂々と食事をすることがあることが分かった．

「拾汈茶屋」の店員は，自分が気に入っている商品を客に熱心に勧めており，台湾では日本のように店員と客という上下関係はなく，友人同士の関係であるようなフレンドリーな接客が行われていることが分かった．

「鼎泰豐」では水の提供や客に対する「いらっしゃいませ」と「ありがとうございました」の挨拶を徹底しており，店員は客の行動を観察し，接客していた．「鼎泰豐」の服務は台湾の一般的なお店とは異なっていた．

「迷客夏」の店員は，客に接客とは関係のない内容の質問を何度もし，フレンドリーに接していた．

「思夢樂」の店員は勤務中にレジ前で爪を切るなど自由に過ごしており，客にどのように見られているか，何か言われるかなどを気にしている様子はなかった．

「すき家」の店員は，「いらっしゃいませ」「ありがとうございました」の挨拶を徹底しており，客のクレームにも謝罪し素早く対応していた．日本と同じ服務文化が導入されていた．

第 2 節　フィールド調査対象からみる台湾服務文化の現状

フィールド調査対象を分類すると，「我的小館」，「拾汈茶屋」，「鼎泰豐」は台湾企業，「迷客夏」は外資系（フィリピン系），「思夢樂〔しまむら〕」，「すき家」は外資系（日系）企業となった．

「我的小館」，「拾汈茶屋」，「迷客夏」，「思夢樂」では，店員と客の間に上下関係がないフレンドリーな服務，「鼎泰豊」と「すき家」では，店員と客の間に上下関係があり，店員が客に丁寧に対応する服務が行われていたことが明らかになった．服務の方法は，台湾企業か外資系（フィリピン系，日系）企業ということは関係なく，各企業の方針に基づいて決まるのである．

第 2 章　台湾の「ヨコ社会」の形成

第 1 節　「タテ社会」,「ヨコ社会」について

日本では「タテ社会」が形成されており,「タテ社会」には，序列を重視する特徴がある.「ヨコ社会」には，主従関係や上下関係は存在せず，人々は自分たちの意思で自由に他人と繋がることができる特徴があり,「ヨコ社会」の例として父系血縁集団があげられる.

日本のように「タテ社会」が形成されている社会では，上下関係が重視されているため，店員は客に対して礼儀正しく丁寧に対応している．一方で，「ヨコ社会」が形成されている社会では，相手と対等の立場でものごとが考えられており，店員と客同士に上下関係がなく，店員は客に対してフレンドリーに接しているのである.

第 2 節　台湾の「ヨコ社会」形成

17 世紀頃から漢族が中国大陸から台湾に移住し始めたことで，台湾の漢族人口が増加した．その結果，漢族の特徴の 1 つである地縁・血縁社会という「ヨコ社会」が台湾に形成されたのである.

第 3 章　台湾の服務文化の本質と日本への導入

第 1 節　台湾の服務文化の本質

「ヨコ社会」には「主従関係や上下関係が存在しない」という特徴があるため,「ヨコ社会」が形成されている台湾では店員が客に対してフレンドリーに接しているのである.「ヨコ社会」が形成さてれている台湾では，集団を形成する人々の同質性により，上下関係よりも対等な関係が築かれている.

台湾の服務文化の本質とは,「ヨコ社会」による同質性の中に仲間を招きいれていることであると考える．台湾では，一旦店に入ると，客であったとしてもその店の仲間として温かく迎えられる．店員が客を単なる外部の人として扱うのではなく，その店の仲間として迎え入れ，上下関係がなくフレンドリーに接することで，客は親しみや安心感を覚え，ほっとできるのである.

第 2 節　台湾の服務文化の日本への導入

「鼎泰豐」が日本の服務文化を取り入れたことで世界的に有名なブランドに成長できたことからも，日本の服務文化にも優れている点があると思われる．もともと日本にある，店員が細かいところまで気を遣い，礼儀正しく対応する服務を残しつつ，上下関係がなくフレンドリーな台湾の服務文化を導入すれば，客がその服務に親しみや安心感を覚え，ほっとできるのではないかと考える.

おわりに

本稿は，台湾における服務文化について論じた．台湾では，店員と客の間に上下関係がなく，店員は客に対してフレンドリーに接する服務文化があり，日本では，店員と客の間に上下関係があり，店員は客に対して礼儀正しく丁寧に接する服務文化がある．そのような服務の違いに，台湾では「ヨコ社会」，日本では「タテ社会」が関係していることが原因であると考え，台湾の服務文化の特徴について考察した.

第 1 章では，台湾にある「我的小館」,「拾汌茶屋」,「鼎泰豐」,「迷客夏」,「思夢樂〔しまむら〕」,「すき家」でフィールド調査を行った結果について論じた.

第 2 章では，台湾の「ヨコ社会」には，上下関係がないという特徴があり，台湾に中国大陸からの漢族が移住したことで，漢族的な地縁・血縁社会という「ヨコ社会」が台湾に形成さたことを論じた.

第 3 章では，台湾の服務文化の本質と日本への導入について論じた．台湾の服務文化の本質とは,「ヨコ社会」による同質性の中に仲間を招きいれていることであることを明らかにした．台湾では，一旦店に入ると，客であったとしてもその店の仲間として温かく迎えられるのである．今後の日本では，店員が客の細かいところまで気を遣い，丁寧に対応する日本の服務文化を残しつつ，店員と客の間に上下関係がなく，店員がフレンドリーに接するような台湾の服務文化を取り入れることを提案した.

主要引用文献

[1] 中根千枝『タテ社会の人間関係 単一社会の理論』1967.2.16 第 1 刷 2013.12.18 第 123 刷 講談社
[2] 石田友三『ヨコ社会の理論－暮らしの思想とは何か－』1995.12.10 影書房
[3] 松本鎗吉『中国人の特性と生活』1947.7.20 明倫閣
[4] 何義麟『台湾現代史―二・二八事件をめぐる歴史の再記憶』2014.9.17 平凡社
[5] 大東和重『台湾の歴史と文化-六つの時代が織りなす「美麗島」』2020.2.25 中央公論新書

ゲーム「原神」のグローバルポピュラーから見る中国「国潮」現象の本質

The Essence of the Chinese 'Guochao' Phenomenon as Seen Through the Global Popularity of the Game *Genshin Impact*

フ セイ
Jing Fu

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 国際文化専修

キーワード：中国，国潮，ゲーム，グローバルポピュラー
Key words：China, National Trends, Game, Global popularity

１．目的

近年, 中国国内外で「国潮」（中国ポピュラーカルチャー）現象が注目を集めている. JETRO の分析レポートでは,「「国潮」の「国」は「国貨」（自国のブランド商品）という言葉から始まったもので,「国潮」は中国の伝統的文化要素と現在のトレンドを組み合わせた「国貨」のことを意味する.」(1) と「国潮」を説明している. この現象は, 中国の若者を中心に,国内外で人気を博す中国独自のポピュラーカルチャーが急速に広まっていることを指す. 中国の国内において, 2021 年 5 月に, 人民日報と百度が検索データに基づいて過去 10 年間の中国ブランドと中国製品を検索する人々の傾向を調査したデータによると, 中国ブランドの検索数と頻度が大幅に増加しており, 10 年間で 528%上昇した.

「国潮」現象のなかでも, 特にアニメやゲーム産業を象徴的な分野として世界中に注目されている. 中国発のオリジナル作品が中国の国内, そして海外市場でも広く受け入れられるようになっている.

中国ポピュラーカルチャー流行の中で, 特に注目すべき事例として挙げられるのが, 2020 年にリリースされたゲーム『原神』である. 米調査機関 data.ai の 2024 年の報告によれば,『原神』はリリース以来の累計消費者支出が 50 億ドルに達し, モバイルゲームとして史上有数の成功を収めたと発表した. さらに本作は, ゲーム内における中国文化要素を取り入れ, 海外のプレイヤーに中国文化を体験させる機会を提供するという, 単なる娯楽を超えた文化的役割も果たしている. このように,『原神』の成功は「国潮」現象の一環として位置付けられ, 中国のポピュラーカルチャーが国際的な影響力を持つことを示す重要な事例となっている.

以上を踏まえて, 本研究では『原神』に焦点を当て,どのようにして世界市場で成功を収めたのか,その成功が中国文化の国際的な受容にどのように寄与しているのかを考察する.このことにより,中国ポピュラーカルチャー「国潮」現象の本質的な理解を明らかにできるだろう. また,『原神』がまた中国ポピュラーカルチャーが日本市場で成功を収めた要因を分析し,今後の日中間の文化交流の可能性についても検討する.この研究を通じて,ゲームが文化の伝播手段としてどのような役割を果たしているのかを明確にする.

２．方法

本研究では,『原神』のグローバルな成功を多角的に分析するために, 具体的には文献調査,事例分析,比較分析,メディア分析の 4 つの手法を中心に研究を進めた.

最初に文献調査として JETRO の分析レポートやゲーム市場調査報告,ゲーム業界の売上データなどを収集し,『原神』の市場評価を定量的に分析する.事例分析では,『原神』のゲーム内要素,す

なわち文化的モチーフ,キャラクター設定,ストーリー,音楽,イベントを詳細に検討し,それらがどのように中国文化と結びついているのかを明らかにする.さらに,比較分析として,『原神』の市場評価を中国国内と海外,特に日本市場で比較し,中国ポピュラーカルチャーの国際的な展開の特徴を探る.メディア分析では,『原神』のオフラインでのイベントや二次創作の広がりを調査し,リアルと仮想の文化交流の影響を考察する.

これらの手法を総合的に用いることで,『原神』の成功が単なる商業的な要因だけでなく,文化的要因や異文化交流の側面とどのように関連しているのかを明確にする.

３．結果と考察

本研究の結果として,『原神』のグローバルポピュラーには複数の要因が関与していることが明らかになった.さらに『原神』を通じて,中国発のポピュラーカルチャーである「国潮」現象の本質を多角的に分析してきた.

『原神』の成功の本質は,miHoYo が日本文化から学んだ創造性と,中国の文化的背景を融合させた結果である.1978 年以降の「改革開放政策」がもたらした文化的自由と交流の拡大により,中国社会は海外の文化を受容する土壌を形成し,特に日本のアニメやゲーム文化は,中国の若い世代に多大な影響を与えた.miHoYo の創業者たちが『新世紀エヴァンゲリオン』に代表される日本文化からインスピレーションを受け,それをクリエイティブな形で表現したことは,その象徴的な一例である.

次に,『原神』は,単なるエンターテインメント作品を超えて,現実と仮想世界の文化的融合を実現した点で,他のゲームとは一線を画している.例えば,ゲーム内での「璃月」のゲームデザインは中国文化が巧妙に組み込まれており,毎年中国の旧正月時期にゲーム内で開催される限定イベントである「海灯祭」は現実の中国の祭りや文化を仮想世界で再構築し,グローバルなプレイヤーに異文化理解の機会を提供している.

『原神』の成功は,単なる「単一方向」となる文化の「輸出」ではなく,多文化間での双方向的なコミュニケーションが実現された点にも重要である.特に,日本市場での成功は,miHoYo が日本のポップカルチャー文化への深い理解を持ち,日本文化への敬意をゲームに取り入れつつ,プレイヤーの期待を的確に捉えている証拠である.このように,異文化を尊重しつつ自国のアイデンティティを表現する姿勢が,『原神』の成功を支える重要な要因となっている.

『原神』は,中国のポピュラーカルチャーがどのようにしてグローバル市場で成功し得るのかを示す代表的な事例である.その成功は,改革開放政策による文化的交流の成果であると同時に,

「miHoYo」の創造性や技術力の賜物でもある.これにより,中国のポップカルチャーである「国潮」現象が単なる国内的なブームに留まらず,国際的な文化現象として定着しつつあることが明らかになった.

４．まとめと今後の課題

本研究では,学術的な観点からゲーム『原神』のグローバルな成功を分析し,中国ポピュラーカルチャー「国潮」現象の本質を明らかにすることを目的とした.その結果,『原神』の成功は,中国ポピュラーカルチャーの国際的な受容を促進する重要な要因であることが明確になった.『原神』の文化的影響は,ゲーム内だけにとどまらず,オフラインイベントなどを通じて現実世界にも広がりを見せており,ゲームが文化の伝播手段として機能していることが示された.一方,今後の課題として,異なる国や地域のプレイヤーが『原神』の中国文化要素をどのように受け入れているのかについて調査を通じて分析することも必要である.さらに,中国政府のゲーム規制が今後の中国ポピュラーカルチャーやグローバル展開に与える影響についても検討することで,より包括的な分析が可能となるだろう.

主要参考文献

[1] PASH！編集部『原神ファンブック』
2023.04.28 主婦と生活社
[2] 劉文兵『中国 10 億人の日本映画熱愛史:高倉健、山口百恵からキムタク、アニメまで』
2006.8.17 集英社

現代青年期女性の「ひとりの居場所」についての一考察
—成長過程における肯定的な側面に着目して—

A Discussion About “Personal Ibasho” in Adolescent Women of today:
Focusing of Positive Aspects in the Process of Growth

今瀧 倫乃
Rino Imataki

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻

キーワード：青年期女性，ひとりの居場所，成長過程
Key words：Adolescent Women, Personal Ibasho, the Process of Growth

１．問題と目的

「居場所」とは，本来「いるところ」「いどころ」のような物理的な場所や空間を表す言葉であったが，1980 年代以降の不登校問題をきっかけに注目が集まり，次第に「心の居場所」という物理的側面と心理的側面の両方を併せ持つものとして理解されるようになった．

心理学において「居場所」は，「他者と場を共有し過ごすこと」と「自分ひとりで過ごすこと」の 2 つに分類され，心理的側面に焦点を当てた研究が進められている(中嶋・倉田,2004；岸田，2005)．前者は精神的健康との関連や青年期の発達課題であるアイデンティティの確立などにおいて「重要な居場所」として位置づけられているのに対し，後者はひきこもりをはじめとする心理的問題との関連が懸念され，いわば「居場所がない状態」として否定的な観点で捉えられる傾向が長らく主流であった．

しかし 2010 年代以降，思春期・青年期の人々によって「自分ひとりで過ごすこと」が好んで選択される傾向が垣間見られ，彼らにとって欠かせない「居場所」のひとつとして，その肯定的側面が認識されつつあるという一連の変化が散見されるようになった．

そこで本研究では，「自分ひとりで過ごすこと」をめぐり，従来のような否定的側面の検討に留めてしまうのではなく，青年期女性の成長過程における心理的な支えとして，その肯定的な可能性に焦点を当てた探索的な検討を目的とする．なお，本研究では「自分ひとりで過ごしている」と認識している状態，且つ「心理的居場所感」(則定,2006,2008)を覚えている状態を「ひとりの居場所」と定義し，現代青年期女性の「ひとりの居場所」の在りようを明らかにすることで青年期における心理的支援に新たな視点を提供する一助となることを期待する．

２．研究Ⅰ

【方法】現代青年期女性の「ひとりの居場所」の有無や，そこでの感情体験を先行研究と比較し量的に捉え直すことを目的として，私立 A 女子大学に通う青年期女性を対象に自記入式質問紙調査を行った．調査期間は 2024 年 6 月 17 日～10 月 4 日で，実施場所は授業時間外の A 大学構内のラウンジ等の開放スペースであった．質問紙の構成はフェイスシート(年齢, 所属，居場所の有無，「居場所がある」と回答した人を対象に具体的な居場所の選択，複数の居場所を選択した人を対象に優先順位をつけてもらう)と，ひとりで過ごすことに関する感情・評価尺度(海野・三浦．2011)(18 項目，6 件法)を改訂したものを用いた．

【結果と考察】青年期女性 144 名を対象にした調査の結果，回答数は 137 票，有効回答数は 132 票であった．フェイスシートからは，①現代青年期女性は複数の「居場所」を持っていると認識している傾向があること，②SNS が新たな「居場所」と選択されつつあること，③現代青年期女性は

「居場所がない」の他に「居場所があるという感覚が分からない」という感情体験を抱いていることが示唆された．得られた回答を因子分析した結果，「孤独・不安」「充実・満足」「自立・理想」の 3 因子が妥当であると解釈し，海野・三浦(2011)と同様の尺度構成であった．このことから，現代青年期女性の「自分ひとりで過ごすこと」に対する感情体験は 2011 年時点から変化は認められず，否定的な感情と肯定的な感情の両方を抱いていることが明らかとなった．また「自分ひとりで過ごすこと」は彼らに自立感をもたらすことが示唆され，これは成長を促す一助となっている可能性が考えられためより詳細な検討が必要であることがうかがえる．

３．研究Ⅱ

【方法】研究Ⅰに参加した調査対象者のうち「充実・満足」因子得点が平均値より高く（M=4.78, SD=0.95），かつ研究Ⅱへの参加を承諾した 5 名を対象に描画とインタビュー調査を実施し，現代青年期女性の「ひとりの居場所」における主観的な感情体験の明確化を図った．

【結果と考察】インタビュー調査を KH Coder（樋口，2020）で分析した結果，①「ひとりの居場所」の「心理的居場所感」の性質は小学生から現在にかけて変化していたこと，②「ひとりの居場所」には「他者と場を共有し過ごす居場所」からは得られない「心理的居場所感」（「自由さ」「自立感」「自己内省」）があること，③自分が安心して閉じ籠ることができる「ひとりの居場所」が確立すると，次第に外界にも「ひとりの居場所」を求め探索するようになることが示唆された．

描画は，インタビュー導入前の言語化の促進と「居場所」の想起を目的として実施され，家屋画と室内画のそれぞれに特徴がみられた．特に室内画は能動的に「ひとりでこもる」ことができる部屋が描かれ，そうした空間に留まることで自己内省を深め精神的に安心することができるという仕組みが明らかとなった．このことは，彼らの内的世界において，心の安定や成長を促す「ひとりの居場所」が確立していることを示唆している．

また今回の室内画からは，単に自分の内的世界にこもっているだけではなく，外界との繋がりを意識しながら生活している様子が見受けられ（例：窓やドアの描画ほか），「開けようと思えば開けて外界と通じ合えるが，本人が敢えて閉じている状況」を示していると解釈された．したがって，本人を取り巻く状況としては「他者と場を共有し過ごす居場所」と「ひとりの居場所」の両方が存在し，前者を保持しつつ，敢えて後者を選択している状況と捉えることが可能であり，自分の気分や状況に応じて自由に行き来できる環境が整っていることが示唆された．

４．総合考察

本研究の結果から，現代青年期女性の「ひとりの居場所」について①否定的側面だけではなく，肯定的側面も持っていると認識していること，②「他者と場を共有し過ごす居場所」と同等の価値をもち，彼らにとって必要とされている「居場所」であること，③成長過程に伴い「自分ひとりで過ごすこと」の意識が「受動的なひとり」から「能動的なひとり」に変化していき，そのような状態になって初めて「ひとりの居場所」が確立されること，④青年期特有の課題である心理的離乳や自己形成を促す一助となるような「心理的居場所感」をもたらす可能性が示唆された．

また現代青年期女性は，「他者と場を共有し過ごす居場所」と「ひとりの居場所」を自分のニーズに沿って適宜行き来しながら過ごしている様子が見受けられた．これはそれぞれの「居場所」からしか得られない「心理的居場所感」や役割を彼らなりに理解し，自身の生活を豊かにするために意識されずに行動していると考えられる．

本研究からは，現代青年期女性において「他者と場を共有し過ごす居場所」と「ひとりの居場所」はどちらも欠かすことのできない「居場所」であり，これら複数の「居場所」を自由に行き来できる環境を保証することが，彼らの発達課題や成長を支援することに重要であるということが示唆された．

主要参考文献

[1] 中藤　信哉（2017）．心理臨床と「居場所」創元社．
[2]則定　百合子（2008）．青年期における心理的居場所感の発達的変化　カウンセリング研究，*41*，64-71.
[3] 海野　裕子・三浦　香苗（2011）．ひとりで過ごすことに関する感情・評価尺度の検討　昭和女子大学生活心理研究所，*13*，121-126.

特別な教育的支援を必要とする児童とその周囲児に対する教師の関わりの検討

Examination of teachers' approaches to children who need special support and their classmates.

小池 優衣
Yui Koike

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻

キーワード：特別な教育的支援を必要とする児童，通常学級，教師の関わり
Key words：children who need special support, regular classrooms, teachers' approach

１．目的

近年，共生社会の形成に向け，教育現場においては，障害のある子どもが障害のない子どもと共に教育を受ける仕組みであるインクルーシブ教育システムの構築が目指されている(文部科学省, 2024)．このような環境を整えるためには，特別支援教育が必要不可欠であり，併せて推し進められている(文部科学省, 2024)．

上記の方針を進めていくために，現状把握が必要であるとして，令和 4 年に「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒の実態を把握するための調査」が行われた．調査結果によると，通常学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童は, 10.4%いることが示された(文部科学省, 2022)．このことから，小学校では 1 学級に 1～3 人程度の特別な教育的支援を必要とする児童が在籍していることが推察される．

このような状況に対し，学校では校内委員会の設置など，特別な教育的支援を必要とする児童を学校全体で支援する体制を整えることが推進されているが (文部科学省, 2017)，現状としては，令和 4 年度の調査で著しい困難を示す児童生徒に該当した者のうち, 70.6%が学校としての支援を受けるに至っていない状況であり (文部科学省, 2022)，通常学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童を担任している教師の負担の大きさが懸念される．

実際，先行研究において，特別な教育的支援を必要とする児童を担任する教師が特性の理解や具体的な対応の方法 (木村・芳川, 2006)，他児との関係調整 (角南, 2018) などに困難感を抱くことが示されている．

一方で，特別な教育的支援を必要とする児童も対人関係や学級環境に不適応を起こしやすく，教師からの支援が重要になること，また，クラスメイトらも特別な教育的支援を必要とする児童の理解の困難さから受容しがたく関わりが必要な場面で困難感が生じる場合があることなどが示されている．そこで，本研究では，特別な教育的支援を必要とする児童とその周囲児に対する教師のより良い関わりや教師に対する有効なサポートを考察する材料として，特別な教育的支援を必要とする児童や周囲児に対する教師の具体的な関わりについてインタビュー調査を実施し，整理することを目的とした．

２．方法

【調査対象者】特別な教育的支援を必要とする児童が在籍する通常学級を担任した経験のある小学校教師 4 名．

【調査方法】縁故法により，調査依頼を行った．同意を得たのち, Zoom にて半構造化面接を用いたインタビュー調査を実施した．

【調査内容】特別な教育的支援を必要とする児童を含む通常学級を担任した際の経験について尋ねた．

①児童の当時の状況（学習面，行動面等）
②教師として関わりや対応を行った場面について
③より良い関わりや対応のために行ったこと
④今振り返って，自分の対応をどのように評価し

ているか

尚，本研究は令和 6 年度の大妻女子大学生命科学研究の倫理審査委員会の承認を得ている（承認番号：006）．

３．結果と考察

4 名の教師に対して実施した個別インタビュー調査の結果，“より良い関わりのために行ったこと”，“上手くいった関わり”，“上手くいかなかった関わり”，“今思いつくより良い対応”，“今でも対応の仕方が分からないこと”，“当時あると良かったサポート”等について，教師の考えや感情を交えながら聞き取ることができた．

“より良い関わりのために行ったこと”では，【保護者との連携】【教職員・専門機関との連携】【特別な教育的支援を必要とする児童への直接的な働きかけ】等が語られた．特別な教育的支援を必要とする児童をより良く支援していくためには，保護者と子どもに関する肯定的な共有をする機会を頻繁に設けることで保護者との信頼関係を構築することや，他の教職員に対応に関する相談を行うことでより良い関わりのヒントを得たり，1 人では対応しきれない場面でサポートに入ってもらったりすること，特別な教育的支援を必要とする児童に向き合っていく中で理解した特性に合わせて対応をカスタマイズしたり，指導してばかりにならないよう普段の肯定的な関わりを意識したりするといったことが重要であると考えられた．

“上手くいった関わり”では，特別な教育的支援を必要とする児童の特性に合わせた関わりや心理的援助，周囲児との関係調整になっていたのではないかと考えられるものが挙げられた．これらの関わりが実現された背景には，それぞれの児童にしっかりと向き合ってより良い関わりを試行錯誤した教師らの努力があったことが考えられた．

一方，“上手くいかなかった関わり”では，児童の心理状態や特性への分からなさや，特別な教育的支援を必要とする児童とクラスメイトに対してを 1 人で対応することへの限界から生じていたと考えられるものが多数あり，担任教師へのサポートが必要不可欠であると言える．

“当時あると良かったサポート”では，「必要な時にサポートに入ってくれる存在」があげられていた．

４．まとめと今後の課題

教師は，特別な教育的支援を必要とする児童に対してしっかりと向き合い，より良い関わりを試行錯誤する中で上手な関わりを実現させていることが推察された．一方で，通常学級の担任である以上,計画に沿って授業を進めることや，他児への平等性などを意識する必要があり，個別の対応を常に実施することには限界があることも示された．このような状況に対しては，教師らが求めるように「必要な時にサポートに入ってくれる存在」も学級運営をスムーズにする上で重要であると考えられる．他にも，より良い関わりの模索をサポートできる存在として，スクールカウンセラーなどの心理の専門家の存在が挙げられるだろう．特別な教育的支援を必要とする児童の心理状態や特性に関する理解を深めるためのサポートや，教師が行っている良い関わりを支持しエンパワメントすることで教師の心理的負担を軽減することができるのではないだろうか．

また，今回の研究では 2～7 年目の教師が対象となったが，語りの内容から，経験を重ねる中で新たに習得した対応方法を，過去のケースにも適応可能だったのではないかと振り返る場合があることが示唆された．よって，さらに経験を積んだ教師を対象として調査を行うことで，“より良い関わりのために行ったこと”や“上手くいった関わり”に関するより多くのデータが得られるのではないかと考えられる．

主要参考文献

文部科学省 (2022). 通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について　文部科学省　Retrieved February 14, 2024 from https://www.mext.go.jp/content/20230524-mext-tokubetu01-000026255_01.pdf

角南　なおみ (2018). ADHD 傾向がみられる子どもとの関わりにおいて生じる教師の困難感のプロセスとその特徴：教師の語りによる質的研究　発達心理学研究, 29(4), 228-242.

思春期における不登校経験者の両親イメージの研究
―対象関係の視点から―

A study of the image of parents those who have experienced school refusal during adolescence
―From viewpoints of object relations―

大用 ゆきの
Yukino Daiyo

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻

キーワード：不登校, 思春期, 対象関係
Key words：school refusal, adolescence, object relations

１．問題・目的

近年，不登校の増加は社会問題となっている．文部科学省の調査(2024)によると，小・中学校における不登校は過去最多の346,482人(前年度299,048人)と大幅に増加している．

不登校は「自分自身のこと」「家庭・家族の影響」「学校でのこと」の 3 つの要因が絡み合って発生しており，なかでも，対人関係をめぐる問題が不登校に大きな影響を与えていると考えられる(小柴，2017；子どもの発達科学研究所，2024)．対人関係上の問題を抱える者は親子，友人，集団と相手が変わろうと同じ問題を繰り返しうるとされている．精神分析的な人格理論では，この繰り返す対人関係性を対象関係という．

本研究では，対人関係の基礎となる親子関係に着目し，対象関係の視点から不登校当事者の両親イメージに焦点を当てた．両親イメージの変化と不登校の回復プロセスをそれぞれ明らかにし，両親イメージの変化が不登校の回復プロセスにどのように影響するのかを検討した．

２．方法

調査対象：中学生時代に不登校になったものの，早期に学校復帰を果たすことができた不登校経験を有する成人女性 3 名．縁故法により，長年不登校支援に従事している児童精神科医師に「現在は社会的活動を行っており，不登校経験を抵抗なく語れる方」を紹介してもらった．

調査期間：2024 年 9 月から 10 月に実施した．

調査方法：研究参加への同意を得たのちに，対面またはオンラインにて半構造化面接法による家族イメージ法(FIT)を用いたインタビュー調査を実施．尚，本研究は 2024 年度の大妻女子大学生命科学研究倫理審査委員会の承認を得て行った(受付番号：06-003)．児童精神科医師の所属先の承認も得た．

調査内容：インタビュー項目は，①ご本人の基礎情報，②不登校前の状況について，③不登校時の状況について，④学校復帰後の状況についてであった．また，家庭での状況を伺う際に，両親イメージに関連して「不登校以前」「不登校期間中」「学校復帰後」の各時期における父親，母親，それぞれの人となりを形容する語句を 5 つ回答してもらった．

分析方法：FIT 等による両親イメージの整理と M-GTA による逐語記録の分析を行った．

３．結果と考察

FIT 等による両親イメージの整理の結果，不登校当事者の両親イメージは肯定的なイメージだけでなく，厳しい，あるいは過保護のイメージといった否定的なイメージを抱いていることがあり，不登校の経過に伴ってイメージが変化していくことが示された．

また，不登校の回復プロセスについて M-GTA による分析の結果，10 個の概念と 8 個のカテゴリーが生成された(図 1)．

不登校になるきっかけには対人関係不安や転校，体調不良などがあり，登校渋りの時期に親や学校の先生から出席を強いられる【強制され選べない】環境に置かれることで悪循環に陥って，不登校状態へと移行していく．不登校期間中には，不登校

に否定的な親や学校との関係は悪化する．この時期はスクールカウンセラー(以下 SC)や担任・養護教諭，主治医そして不登校に否定的な親とは別の親(ケアテイカーの役割を担う親)の存在が重要になる．彼らが不登校期間中の悩みや家族関係の話，その他にもたわいもない《私の話を聞いてくれる》存在となり【寄り添ってもらえる】体験をする．特に家庭のなかではケアテイカーの役割を担う親との情緒的な関わりを通して安定した二者関係を築くことが重要である．しかし，もう一方の親が登校を催促したりと本人にとっては《間に入ってくる邪魔》な関わりをすることで，安定し始めた二者関係を壊されそうになることもある．とはいえ不登校期間中は家族全員に【私中心の生活】を支えてもらうことになり，それが回復へのプロセスとなる．しかし，この【私中心の生活】は家族にとってたやすいことではなく，耐え切れなくなった場合には入院が家族を支える器として働くこともある．入院生活で家族と離れ，同年代の不登校児童生徒と関わりを持つことが，他者イメージの変化の重要な機会となる．【傷ついてもお互い様】であることに気が付いて，自らの意思で【この人には】これを話そう，【この人には】これは話さないといったように家族や友人，SC などとの付き合い方を選択するようになっていく．上述のケアテイカーの存在が心の拠り所になる一方で，不登校によって親に迷惑をかけているといった罪悪感と自分の気持ちはわかってもらえていないといった【相反する気持ちにモヤモヤする】葛藤は持ち続けていた．そして，学校復帰のきっかけとして将来の進路に対する夢ができたことや，転校や進学といった環境の変化があり，高校入学に伴い自分で選んだ授業を受ける，自身の行ける日に登校するといった【強制されず選べる】環境になったことで，学校復帰に向かっていくことになる．

４．総合考察

本研究の結果，不登校以前の両親イメージは不登校のきっかけに，不登校期間中の両親イメージは回復プロセスで重要な家庭での密着し安定した二者関係の構築に影響していたことが示唆された．

不登校以前は幼少期に怒られた体験などから「怖い」「何をやっても怒られる」といった厳しいイメージを持っていたという旨の語りが多かった．この両親イメージは思春期には「自身の攻撃性が他者を傷つけてしまう」，といった無意識的な対象関係となり，意識的には対人関係不安として顕在化することになる．その結果として不登校状態へと移行したといえるだろう．そのような対象関係は同年代の不登校児童生徒やきょうだいとの関わりのなかで【傷ついてもお互い様】と気が付けることで修正されたと考えられる．また，この変化には悩み以外にもたわいもない《私の話を聞いてくれる》存在も重要であったと推察される．そして，親との密着し安定した二者関係や【私中心の生活】を通して不登校期間中には「安心する」という両親イメージを持ち，家族が安全基地のような存在として機能することで彼らの回復や成長を支えていたことが示された．

家庭内でケアテイカーの役割を担う親と密着し安定した二者関係を築くことに加え，本人にとっては《間に入ってくる邪魔》な関わりをするもう一方の親が密着した二者関係に対して現実検討を促す第三者的な役割を担うことが不登校の回復プロセスに重要であると考えられた．さらに，本人が選択できる環境が大切であり，これらの要因が重なって不登校の回復へと向かったことが示唆された．

今後は性別や不登校のタイプ別，不登校が維持された例など対象者の拡大が求められる．

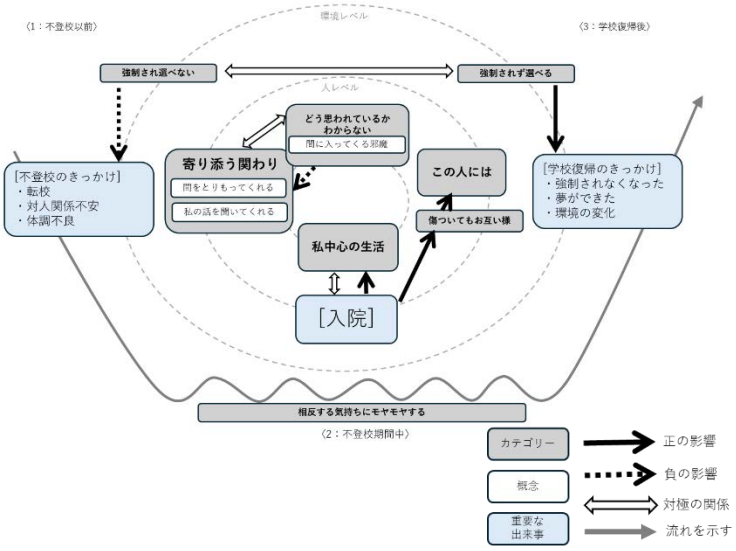


図１　不登校の回復プロセス

主要参考文献

[1]小柴孝子(2017). 不登校発生の背景要因に関する研究−不登校経験者による内省的な語りの質的分析−　家族心理学研究，31(1)，43-55.

中学校スクールカウンセラーのコンピテンシーモデルの検討
―スクールカウンセリングの課題の明確化―

An Examination of Competency Models for Junior High School Counselors
―Identification of Key Issues in School Counseling―

浜本 佳奈
Kana Hamamoto

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻

キーワード：中学校，スクールカウンセラー，コンピテンシー，コンピテンシーモデル
Key words：jonior high School, school counselor, competency, competency model

１．問題と目的

文部科学省は平成７（1995）年度から，児童・生徒や保護者の抱える悩みを受け止め，学校におけるカウンセリング機能の充実を図るための方法の一つとして，スクールカウンセラー（以下SC）制度の運用を開始し（文部科学省，2007），30年が経過した現在は，SCは学校に勤務する心理的支援の専門職として認知されている．一方，SCに関する課題は数多く挙げられており，文部科学省（2007）は課題の一つに，SCの資質や経験に違いがみられることを挙げている．

岩壁ら（2018）は，臨床家の資質向上のための訓練制度を整えることについて「現場の臨床家に求められているコンピテンシーやニーズを調査して課題を明確にすること」の重要性を指摘している．SCの資質の向上・均等化を目指すにあたっても，SCに求められているコンピテンシーやニーズを調査し，スクールカウンセリングの課題を明らかにすることが求められる．また，SCへのニーズを検討する上では，特に児童・生徒とのかかわりが多い教員が，どのようにSCを理解し，何をSCに求めているのかについて明らかにすることは重要である．

そこで本研究は，SCのコンピテンシーについて「スクールカウンセリングにおいて効果的な支援を提供する人の根源的特性」と定義し，SCの視点と，教員の視点との比較から，中学校SCのコンピテンシーモデルを検討することで，スクールカウンセリングの課題を明確化することを目的とした．

２．方法

調査対象者：東京都・神奈川県の公立中学校SC 4名および，東京都・神奈川県の公立中学校の教員5名．類似研究（金沢，2014）を参考に，経験年数が３年以上の者を条件とした．
調査期間：2024年5月～8月
調査方法：半構造化面接法によるインタビュー
調査内容：【SC】SCに求められると思うこと，【教員】SCに求めることについて
分析方法：SCおよび教員へのインタビューデータについて，それぞれ修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下，M-GTA）を用いて分析を行った．

尚，本研究は大妻女子大学研究倫理審査委員会の承認（番号：05-043）を受けて実施された．

３．結果と考察

SCに求められることについて，SCは“専門性を発揮するためにどのように働きかけるか”という点を意識していることが示された．また，SCに求めることについて、教員は“SCの専門性をどのように発揮してもらうか”という具体的なニーズに重きを置いていることが明らかとなった．

次に，SCと教員それぞれのM-GTAによる分析の結果から，SCのコンピテンシーの抽出を行った．結果，《心理職的態度》，《自己意識・自己理解》，《専門的知識＋α》，《伝わりやすさ》，《社会人的振舞い》，《勤務校の風土の理解》，《学校の動きや考えの理解》，《SCの持つ様々な立場の理

解》,《学校・生徒主体の支援体制》,《SC 役割の明確化及び周知》,《支援体制の強化・拡充》,《各所との連携》,《情報の適切な共有》,《専門性の伝授》の 14 個のコンピテンシーが抽出された．また，前者 9 個を「SC の機能コンピテンシーに共通する土台となるもの」である SC の基盤コンピテンシーに，後者 5 個を「スクールカウンセリングにおける心理専門職の業務を質の高いレベルで行うことのできる資質・能力」として SC の機能コンピテンシーに分類した．

そして抽出された SC のコンピテンシーについてモデル化を行った（図 1）．結果，マクロな視点では基盤コンピテンシーを土台として，機能コンピテンシーが発揮されていくこと，またコンピテンシーがニーズに向かって発揮されていく流れが示され，SC は多様なニーズに対応するために，学校で働く心理職としての態度や姿勢を身につけ，SC の専門性を適切に発揮していくことが求められるとした．これは，“SC の専門性をどのように発揮してもらうか”という具体的なニーズに重きを置いた教員の視点に近いものであると考えられる．一方ミクロな視点では，SC の基盤コンピテンシーと SC の機能コンピテンシーは，影響し合う関係性を示し，SC は日々の活動の中で，それぞれのコンピテンシーを高めていく姿勢が求められるとした．これは，“専門性を発揮するためにどのように働きかけるか”を意識している SC の視点に近いものであると考えられる．

本研究では，スクールカウンセリングに関する課題として，主に配置頻度の増加と SC の役割の明確化の 2 点が挙げられた．今後，SC に頼れる機会として勤務の頻度の増加や，SC が担う役割が明確に示されることで，教員のみならず，生徒や保護者が SC を頼りやすくなること，より SC の活用の幅が広がることが期待される．

４．まとめと今後の課題

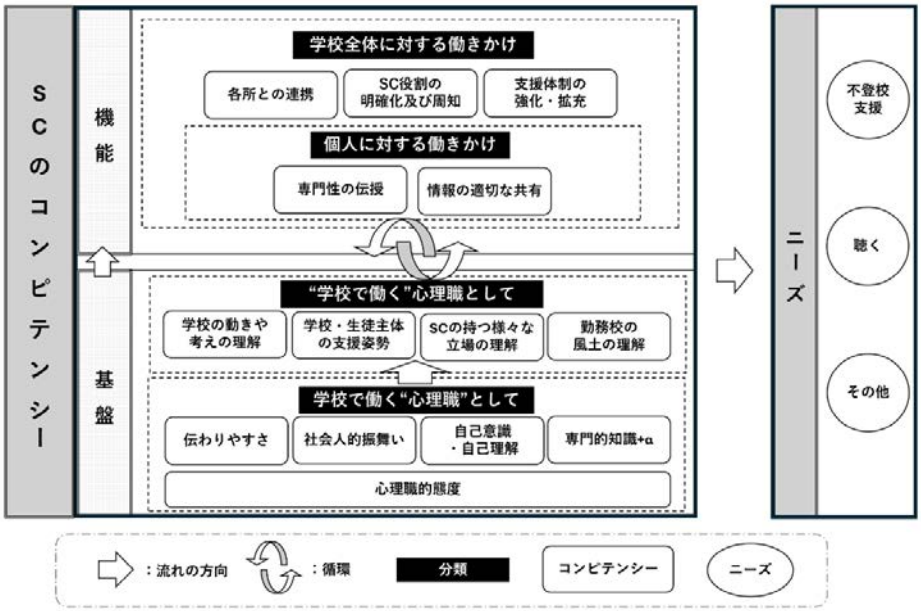
本研究で導出された SC のコンピテンシーモデルは，今後 SC 自身の自己洞察や振り返りのツールとしての活用や SC の研修制度への応用が期待される．また，今後の展望として，SC の発達段階ごとのコンピテンシーの検討や，スクールカウンセリングに関わる他の専門職など，幅広い視点を取り入れることでより，応用性の高いものとしていくことが求められると考えられる．

主要参考文献

[1] 元永拓郎（2024）．日本における心理専門職養成に求められるコンピテンシー概念．公認心理師：実践と研究．3(1)，26-33.

[2] 岩壁茂・奥村茉莉子・金沢吉展・野村智子（2018）．心理職の『実践的総合力』の習得に向けて―資格取得後の高度対人援助専門職育成プログラムの開発．公益財団法人明治安田こころの健康財団（編）．50 周年記念研究助成論文集．1-43.

図１．中学校 SC のコンピテンシーモデル



心理臨床場面においてクライエントの自己隠蔽が緩和される要因とプロセス

Factor and process of relief to client's self-concealment in counselling

森川 実花
Mihana Morikawa

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻

キーワード：自己隠蔽，カウンセリング，心理療法
Key words：self-concealment, counselling, psychotherapy

１．問題・目的

カウンセリングにおいて，クライエント（以下，Cl）がセラピスト（以下 Th）に対して自らの情報を積極的に隠すことがある．本研究ではこれを「自己隠蔽」と定義する．先行研究では，Cl の自己隠蔽がセラピーの阻害因子となりうることや，反対に Cl が隠していた事柄を開示することには一定の治療効果があることが確認されてい（Farber ら，2004）．また，治療関係構築に影響を及ぼす Th の関わりについても，さまざまな知見が得られている．しかし，Cl の自己隠蔽が緩和される具体的なプロセスや，その緩和のために有効な Th の関わりについて，個々の事例の個別性を踏まえて検討された臨床研究は見当たらない．これが明らかになれば，Cl の自己隠蔽を緩和しよりよい介入につなげるためにはどのようなアプローチが有効であるのかについて，考えるうえでの一助となることが期待できる．

そこで本研究では，自己隠蔽を心理臨床場面において Th と Cl の相互作用や関係性の中で起こる現象として捉え，冒頭のような定義のもと，Cl の自己隠蔽が変化した過程を個別事例的に分析することで，Cl の自己隠蔽が緩和される要因とプロセスについて明らかにすることを目的とする．

２．方法

本研究では，研究協力者にインタビュー調査を行い，その結果を質的に分析するという方法を採択した．研究協力者は，過去に受けたカウンセリングにおいて自己隠蔽がみられ，それが緩和された経験のある現在健康な成人とした．現在の健康状態などについて尋ねる質問紙調査を実施した上でインタビュー調査を行った（表 1）．

表 1：研究協力者の事例の概要

協力者	年齢	性別	主訴
Aさん	30代前半	女性	恋愛、家族、教授との関係、学歴についての悩み 学歴コンプレックスについて
Bさん	20代後半	男性	精神的な落ち込み、不登校、祖母からひどい扱いを受けていたことについて
Cさん	20代前半	女性	児童精神科の医師から勧められた
Dさん	30代後半	女性	夫の家族との付き合いについて
Eさん	30代後半	女性	男性や怒鳴り声が苦手。20歳くらいまでのことをほとんど覚えていない。その辺りのことを整理したい
Fさん	20代後半	女性	昔のことを思い出し、気持ちを自分で処理できなくなった
Gさん	20代後半	男性	虐待を受けており、精神的につらいこと
Hさん	20代前半	女性	自己受容ができていない。母との関係や生育歴について整理したい

分析は，データを個別のものとして扱い，事例検討的に行った．

３．結果と考察

結果として，事例ごとに多様な要因とプロセスが示された．事例ごとの自己隠蔽が緩和された要因をまとめたものを表 2 に示し，いくつかの共通点や相違点をポイントとして取り上げ考察する．

まず自己隠蔽の心理的背景として，研究協力者の多くが「Th にどう思われるかが怖い」という気持ちをもっており，こうした恐れを解消できるような関わりが，Cl の自己隠蔽を緩和するために有益に働く場合が多いのではないかと推察された．また「言っても仕方ない」と考えていた対象者は 1 名のみ（D さん）であったことを踏まえると，自らのネガティブな情報を隠すという行為は，それを話した際のポジティブな効果の少なさではなく，ネガティブな効果の存在を予期するために実行されている可能性がある（永井・山岸，2015）とする知見と重なる結果であると捉えられる．

表 2: 自己隠蔽が緩和された要因のマトリックス表

	Aさん	Bさん	Cさん	Dさん	Eさん	Fさん	Hさん
共感的	○			○		○	
肯定する	○	○					
否定しない			○				
理解しようとする・興味をもっている態度	○					○	
関心がない態度					○		
自己開示	○						
雑談		○					
くだけた言葉遣い		○		○			
フランクな雰囲気		○		○			
沈黙の時間が少ない		○					
家族についても聞く			○				
柔軟な頻度の調整			○				
Clの代わりに怒る			○			○	
Clの気持ちを一緒に体験する						○	
味方であることを伝える			○				
ゆっくりと時間をかけて関わる			○				
Clの意思を尊重する			○				
他の人に対しても人柄が変わらない				○			
他者を否定せず、Clの感情に焦点を当てる				○			○
軽い口調でClのつらさを認める				○			
身振り手振りや表情が豊か				○			
涙ぐむ				○			
違和感を話すことの重要性に関する説明				○			
遠い距離を保つ					○		
テクニックではない存在感					○		
信頼を取るために近づくことをしない					○		
Clがよくわからないことを言っていても質問をしない					○		
余計な動きをしない					○		
空白な感じ					○		
客観的で冷静な声がけ						○	
決めつけない・Thの解釈を押し付けない							○

次に自己隠蔽の緩和に役立つ Th の関わりとして, 共感的かつ肯定的に Cl を理解しようとする関わりが, Th-Cl 間の関係性構築に役立ち, 結果として自己隠蔽が緩和されることにつながるのではないかと考えられた. また, くだけた言葉遣いやフランクな雰囲気といった要因に加え, 雑談も話すこと(B さん), Th の人となりが Cl に伝わること(D さん)が有効に働いた事例が示されたことから, カウンセリングにおいて重視されてきた非日常的なコミュニケーションだけではなく, 日常的なコミュニケーションを取り入れたアプローチが, Th-Cl 間の信頼関係構築につながり, 自己隠蔽の緩和に役立つ場合があると考えられた. 一方, 解離症状があったこと, 深刻なトラウマ体験を抱えていると推察されることから, 他の研究協力者と比べて病態が重いと推察される事例(E さん)では, 「遠い距離を保つ·余計な動きをしない·空白な感じ」といった非日常性を厳密に守るアプローチが重要であったことが示された. このことから, Cl の病態水準や精神的な健康状態, 内省力を踏まえ, Cl に合わせた関わり方をすることが自己隠蔽の緩和のために重要であると考えられた. さらに, Th が Cl の話に出てきた他者に対して「Cl の代わりに怒る・否定する」という関わりについても, 有効であるかは事例によって異なるということが示された. Cl から語られた話が家族に関するものであるなど, Cl の重要な葛藤が生じていると推察される場合(D さん·H さん)では, Th が安易に怒ったり否定したりすることは, Cl 本人が葛藤を抱えながらも少しずつ自分の気持ちに向き合い整理していくプロセスを阻害する可能性があり, 結果として自己隠蔽が維持されることにつながるのではないかと考えられた. 加えて, 信頼関係が構築できていない段階で自己隠蔽を解除することが傷つき体験につながるリスクがあることが示された(A さん). 一方で多くの研究協力者が, 安全な形での自己隠蔽の緩和によって, 主訴を扱えるようになる, 情緒的な癒しを得るなどの治療的効果を得ていた. Th は Cl の状態や Th と Cl の関係性などを総合的に鑑み, 自己隠蔽の緩和に役立つような関わりを試みる必要があると考えられた.

4. 今後の課題

今後は, より詳細なプロセスについて明らかにするため, 事例をタイプごとに分けてプロセスモデルを生成する, 実証的な課題分析を取り入れるなど, 分析方法を工夫することが有効なのではないかと考えられる. また本研究では, カウンセリングの期間の長さ, Cl の病態水準, 当時の健康状態などといった要因について統制されていない. 今後はこのような観点を踏まえて検討することで, 自己隠蔽の緩和に役立つ心理支援のありようについて, より詳細に明らかにすることができると考えられる.

【付記】本研究は, 大妻女子大学人間生活文化研究所令和 6 年度大学院生研究助成(B)(課題番号 DB2431)より研究助成を受けた. また, 令和 5 年度大妻女子大学生命科学研究倫理委員会による承認を得て行った(受付番号 05-041).

主要参考文献

[1]Farber,Barry.,Berano,K.C.&Capobianco,J.A.(2004). Clients'Perceptions of the Process and Consequences of Self-Disclosure in Psychotherapy. Journal of Counseling Psychology, 51(3), 340-346.